

ドラゴンクエストゼロ 始まりに向けて

野村友也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔から魔王を倒す勇者が生まれ世界は守られてきた。

一方ソルクトルムでは、五十年前に勇者と共に魔王を打ち滅ぼした賢者の孫であるア
ドリスクは隣町に確実に行ける『賢者の使徒』として旅立とうしていたが、風邪を引い
てしまい自らを含めたたつた三人で行くことを強いられる。

周りからは賢者の孫だからだと太鼓判を押されるが、しかしアドリスクは魔法が一切
使えないただの剣士だった……。

目

次

	序章 始まり	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章
第Ⅰ章		1 旅立ち	2 みぞうちは大切に	3 王の思惑	4 出発	5 不安	6 窮地	7 ボストロール	8 約束	9 一対一	10 過去を見つめて
11 背けてきた現実											
105	96	87	77	66	54	47	43	32	12	6	1

第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章	第Ⅰ章
17	16	15	14	13	12
絶望の果てに	その音は	協力	真意	救世主	決心

序章 始まり

ある時、神が生まれた

神は大地に生物を誕生させた

その中で、神が興味を持った生物があつた

知性と理性を備えたそれを「人間」と名付けた

可能性を模索する人間は見ていて気分が良かつた

しかし人間は集落を作り、村を作り、街を作り、そして……争つた

そんな人間に神は激怒し、二つに分かれた

「聖なる者」「悪しき者」

より強い力を持つた「悪しき者」は「聖なる者」を封印

地上に降りた「悪しき者」は魔物を作り出し自らを大魔王とし、人間たちを死の恐怖へと陥れだ

封印から目覚めた「聖なる者」はある若者に光を授けた

若者は、勇者を名乗り賢者、戦士と共に数年のうちに大魔王のもとにたどり着き相討ちとなつた

その後も魔物と人間は争いを続けた

「聖なる者」はその度に人間に力を貸した

「聖なる者」はある時からこう呼ばれるようになつた

「精靈ルビス」と……

「これで明後日の準備は終わつたか」

マイナンがやつている防具屋で買った防具を着てみてアドリスクは一人ごちる。

「武器も鋼の剣なんて高価なもの、格安にしてくれたからな。行く前に武器屋のおつき
んに礼言わないと」

鞘に収まつた剣を手でなぞる。流石に外に出るのに木刀はまずいと、先日武器屋に出

向いたときに見つけた掘り出し物だ。

少し重いが使えば慣れてくるだろう。

期待を胸に躍つていると、コンコンと家のドアが叩かれた。

開くと王宮の兵士が数人、扉の前に立っていた。

「アド今からどこかに行くのか？」

兵士の一人が值踏みするようにアドリスクを見る。ナチュラルに話しかけてきたのは、知り合いの男だつた。どうやらこいつ兵士になつたらしい。

そんなことよりもアドリスクは自分の恰好に顔を赤くした——これじやまるでピクニックを楽しみにしている子供じやないか……。

「んん、どうしたなんかようか？」

アドリスクは軽く咳ばらいをし、突然やつてきた兵士に理由を尋ねる。

「いや王様がな……これをお前について」

男は腰元の布袋に手を伸ばし、紙で包まれた何かを取り出した。

「なんだそれ」

「宫廷魔法使いが調合したすぐに眠ってしまうという薬らしい」

「なんでそんなもんを俺に？」

「さあ王様の命令だからな下つ端の俺にはわからん」

アドリスクは受け取り、粉状の薬を眺める。

「——ただ」

少しだけ舐めたり指でなぞつたりしていると目の前の男が不敵な笑みを浮かべた。

「そんな、ピクニックでもいくような姿でいるお前には丁度いい薬かもな」「なつ」

的確に言い当てられたアドリスクは早くこの装備を解きたいと、そう思った。

第Ⅰ章 1 旅立ち

ルルムソルクニアドリスクは今までにない体調不良に襲われていた。

のどがイガイガする。からだもだるい。毛布を一枚被つているのに寒気に襲われる。気分を変える為体を起こすと、窓の外では聖歌隊が高らかに歌い、様々な色をした光の玉が、宙へ舞つてはまるで花が咲くように、開きその花弁があたりに散つていた。

明日のための余興だろう。人々の話し声がここまで聞こえてくる。特に本日の主役である、『賢者の使徒』であふれかえっていた。

賢者の使徒は、飲んでは食つて、仲間と剣を振つたり、魔法を出したりしてソルクトルム王国最後の夜を過ごしていた——恐らくここで最終的なパーティーが決まるんだろうな……。

そんな彼らをよそに鉛のように重い体をベッドに預けることにした。パーティーには参加できなかつたが、体調が戻れば明日は行けるはずだ。

最後の希望を抱きアドリスクは緑の瞳を閉じた。

ソルクトルムは賢者が生まれた大国の一つ。

そこに住む若者たちは十七になると国を出ていく。賢者も十七で旅に出たからだ。

彼らは冒険の基本である四人一組となつて旅に出る。しかし彼らはすぐに死に絶えたという。

ソルクトルムは大陸を繋ぐ洞窟を抜けた後、近くの街まで最低でも十日はかかるからだ。

駆け出し冒険者達に十日持ちこたえるだけの力はなく、仲間を置いて国に戻る者や自害した者までいたという。

そのような状況にソルクトルムの王は十七になつた若者を『賢者の使徒』とし一度に送り出すこととした。

以後四人一組をいくつも連ねた賢者の使徒は死傷者を一人も出すことなく無事に街までたどり着いたという……。

起きればすでに太陽は沈みかけていた。オレンジに照つた夕陽が目にまぶしい。期日である今日。昼前に一度起きたが、既に彼らは旅立つていたらしく、ご飯を食べて再び眠りについた。

ほとんど丸一日寝ていたみたいだ。おかげでもうすっかり平氣だが今年は断念するしかない。

「ほら行くよ」

眠ろうとすると少女の声が聞こえた。紫色のセミロングをなびかせて勝負服だとう武道着を着た少女——マルカが立っていた。

「マ、マルカ？ なんでお前ここに」

突然の来訪者にアドリスクは目を丸くした。てつきり、既に一人欠けた約束は反故にし、賢者の使徒として彼らに付いていったと思つていたからだ。

「なんであつて……私あんた以外と組む気ないし、それに四人一緒であつて言つたじゃない」

マルカは女では珍しい武闘家だ。その華奢な印象とは裏腹にしかし俺よりも力が強く、胸も更地なためよく男と間違われるかわいそうな奴……いや今はそれよりも。

「そうだとしても、レストンの奴がいないから無理だろ」

けだるそうに起きたアドリスクは「レストン」の名前に思わずため息をこぼす。

『勇者の再来』と言わたまでの剣の腕を持つレストンはいずれ賢者の使徒としてその名声を欲しいままにするだろうと誰もが予想していた。

しかし、あいつは一週間前忽然と姿を消した。理由はわからなかつた。だから今年はレストラン、マルカ、アドリスク、四人の内で唯一魔法が扱えるラルスで行くことは諦め素直に賢者の使徒として旅に出ようと思つていた。

「それはそりだけ大丈夫でしょ、あんたは賢者の孫なんだし」

いつまでも寝巻でいるわけにはいかないと思い着替えていると、少し沈んでいたベッドに座りながらマルカは言つた。

「いやそれもそうだが……」

「真の力が覚醒とかするんじやない？」

「どこの勇者だよ！」

マルカの冗談にアドリスクはツッコミを入れる。それに五十年前に勇者ヘクトルがアドリスクの祖父である賢者と一緒に魔王を倒したばかり。そうやすやすと勇者がいてたまるか。

——それに。

「まあそれはおいといて早く行きましょ」

「どこにだよ」

丁度袖に腕を通し終え、盾をかたどつた赤い宝石のペンダントを首に巻くと、マルカがどこかに催促した。意を唱えるとマルカはアドリスクの家のドアを開け一言、言い

放つた。

『賢者の使徒』として旅立つのよ

第Ⅰ章 2 みぞうちは大切に

起きて思ったのは、体が言うことを聞かないことだつた。

「嘘だろ……ゴホッ。なんで今日に限つて……明日には旅立つてのに」

十二年。あの事件から十二年の月日が流れた。魔法が使えない自分にとつてもはや剣しか道はないと明日のために修行してきた。

魔王が倒れた今、魔物は減つてきたものの根絶やしには至つていない。魔王を倒した英雄の一人、「賢者ウエンデイ」の孫のアドリスクに期待がかかるのは必然だつた。

「とにかく、急いで準備しないと」

昨日もらつた薬でよく眠れたアドリスクだつたが、快眠とは裏腹に体がきつく、鉛のように重たい。おまけに喉からはしゃがれた声しか出らず、やつとのことで自分が風邪を引いていることに気づいた。

それでもアドリスクは五分ほどかけて、傍らにかけてあつた鋼の剣を支えに立ち上がり、防具に手を伸ばした。

もうろうとする意識の中、懸命に装着作業を進め、倒れそうになつてもなんとか踏んばつた。

「俺だけは行かないと」

レストンの不在で約束は無くなつたものの、かけられた期待を裏切るまいと、必死に袖を通していく。

「よし、終わつた」

装備を終えたアドリスクはゆつくりと進んで扉を開くと、待ち合わせていたマルカとラルスが立つていた。

「もう遅いじゃない一体いくら待たせてんのよパーティーならもう始まつて……つてあんた大丈夫?」

マルカはすぐにアドリスクのそばに駆け寄り肩を支えた。今にも倒れそうだったからだ。ラルスも加わり二人でアドリスクをベッドに寝かしつけた。

「大丈夫だつてこれくらいなんともないから」

「いや、そんな見るからに病人つて顔で言われても」「無理しちゃだめだよ」

呼吸も荒く、真っ赤になつた頬をしたアドリスクは無理やりにでも動き出そうとするが二人に止められた。

「今日はおとなしく休んでいなさいよ。今日城に行かなくたつて賢者の使徒として数えられているわけだし」

「そうだよ。明日が本番なんだし今日無理する必要はないよ」

最早抵抗する力さえなかつたアドリスクは装備を解かれながら二人の言葉に「分かつた」とだけ返しすぐに眠りについた。

「旅立つつていつてもたつた二人じや話にもならないぞ」
「そうね……でも『賢者の使徒』の中に本物の賢者の孫がいる状況に皆どんな反応をするのかしらね」

頬杖を付きながらニヤリと笑みを浮かべるマルカはなんだか気味が悪い。

反応か——まさかと思つた。賢者の孫でありますから、妙に剣術に長けていると言われていたアドリスクであつたが、皆が自分の為に出発を遅らせていて、などとは夢にも思わなかつたからだ。

「いや、『賢者の使徒』の起源の血統つてことを考えたら、その可能性もあるのか?」

——もし残つてゐるなら半分、いや俺とマルカがいればあと十人も入いれば無事に隣町ラスペスタへとたどり着くことができるはずだ。

「なるほどな、それでまだ残つてゐるのは何人だ? 半分はもう行つたよな。確か今年は五十人くらいだつたから二十五人、いやせめて十人……」

「三人よ」

腕を組んで問い合わせを発したアドリスクにマルカが淡々と答えた。

——五人か……まあ少し強行軍でもすれば無事でなくともたどり着くだろう。

「少し心もとないが——でそいつら何が使えるんだ？　出来れば魔法が使えるのがいれば結構楽なんだけど」

「そいつら？　アドなんか勘違いしてない？　三人は私とあんたとラルスの三人よ」

マルカが遮るようにアドリスクの言葉に乗せる。それを聞いたアドリスクは何か考えるように上を向きそのまま固まつた。

頭の中で想像していた。基本は前衛に自分とマルカを置き、後衛にラルスを待機させ魔物たちを倒していく。その状態でで何日も耐えながら、ようやく街にたどり着いた自分達の姿が……。

「つて無理だから三人なんて！」

見えなかつた。全く。ただでさえ長距離には馬車が必要なのにそれが手に入れることができないのも一つの要因だつた。馬車を引くにしても一人は必要で普通はその周りを四人で囲むというのが定石だ。

馬車は、その年のその日に出発する『賢者の使徒』でなければ王から馬車はもらえず、半日たつた今、アドリスクは自分たちが今年の『賢者の使徒』であるか疑問だつた。

再び横槍を入れるとマルカの姿が眼前で消えた。否、ただ腰を低くし何かの構えをとつていた。

見覚えのある光景にアドリスクはやれやれといった感じで両手を挙げた。

「そう言うと思つたわ」

「あんまり痛くしないでくれよ」

「それはどうかしら！」

「んぐっ」

マルカは声と共に拳を突き出す。その伸びた腕の先にはアドリスクのみぞうちに吸い込まれる。

アドリスクはただ胃の内容物が出ないと感じると、成長したな……と場違いな感想を覚えるのだった。

カストロ教会ではソルクトルム王国の支援を受けながら、孤児を引き取つては積極的に育てていた。魔王がいなくなつたとはいえ魔物は消えるわけではなく、孤児の増加はどこの国にとつても死活問題であつたからだ。

その中に彼はいた。

小柄で腕も腰も足も細く、一見すると少女のような容姿でその金髪はさらに見る者が彼の性別を混濁させる。さらに彼の職業が僧侶だからなのか救われたものは一様に彼のことを『教会の天使』とそう呼んだ。

「ごめんごめんすぐに連れてくるつて言つたのに……待つた？」
「いや全然待つてないよ」

乱暴に放り出され、二人の会話でアドリスクは意識を覚醒させた。
口の中に酸っぱい感覺はない……どうやら吐いていないようだ。

「マルカちゃんまたやつたの」

会話に夢中のラルスだったが彼女の肩越しに倒れこんだアドリスクを見つけるとすぐさま駆け寄った。

「ホイミ」

一言唱え、両手をみぞうちには掲げた。

みるみる痛みが引いていく。アドリスクはここ最近は憂鬱なことが続いたがやはりこの瞬間が至高のひと時だと囁みしめた。痛みが無くなり体を起こせばすぐ近くにラルスの顔があつた。

「なんでがお前男なんだろうな……どつかの誰かさんに見習つてほしいもんだね全く」「何か言った？」

端正な顔立ちに思わず本音が漏れる。すると怒り混じつた声でラルスの後ろにいたマルカが言つた。

「ダメだよマルカ、アドの傷まだ治つたばかりなんだから」

目の前の病人を助けるため一生懸命ラルスは腕を広げた。

「分かつていてるわよそんなこと」

「だから女のくせに『みぞうちバーサーカー』なんて言われんだよ少しはラルスを見習え」

マルカはあまり頭がいいほうではない、だから昔から自分の意見が通じなかつたり、むしやくしゃした時にはいつも暴力で相手を叩き伏せていた。

みぞうちに入れば、相手が気絶することを知った後は、とりあえずみぞうちを殴るという暴挙に及んでいた。

「まだ寝ぼけているのかしら……ハツ」

思い切り脳が動く。頸につま先が刺さり顔が振り子のように揺れる。態勢的に顔を狙つたらしい——全然分かつてないじやん。

蹴り上げたアドリスクを見てマルカは感嘆の声を上げた。

「顎でも人つて氣絶するのね知らなかつたわ」

その内、ボディはやめて顔にしよとか言いそうだ。

薄れていく意識の中で天使がおろおろとたじろいでいるのを見て、こんな最後も悪くない、などと思つてしまつた。

「あーあ、もうすぐ交代だな」

地平線に夕陽が沈んでいくのが見える。その様子を見ながら男は口を大きく開いた。

「欠伸すんなよ全く……まあそれだけ平和になつたつてことか」

城門を守る兵士は退屈な日常に安堵していた。魔王が倒されて数十年、周辺の魔物は弱くなり、見張りの兵士を見かけたとたん魔物達はことごとく逃げていく。そのせいかな國の端、サラス大森林を背にそびえ立つソルクトルム城への志願兵は毎年多い。

「昨日の賢者の使徒を送る会で出たご馳走また食べてねえな」「お、おいあれ見ろあれ」

注意を受けた兵士が昨日ふるまわれた料理を瞼の奥に浮かべていると、もう一人が隣の男の肩を揺すつた。兵士は寝ぼけ眼をこするがそれでも腑抜けた顔は変わらない。目の前にある夕陽が落ちて夜のとばりを灯せば今日の勤務は終わりだからだ。

舗装された道の上を男を脇に抱えた、女が、金色の髪をした男の子と共にこちらに近づいてきていた。

「こんな時間に出勤か？　どこの所属だ？」

我に返った男は三人の姿を眉をひそめて見る。
するともう一人の男がわなわなと震え武闘着の女を指さした。

「いやあれは『みぞうちブレーカー』だ」

「それって……」

一度受けたことがある彼らは全身の血が冷えわたつて、肩を震わせていた。

「お待ちしておりました若き『賢者の使徒』よ」

涙目の兵士に連れられ、持ち物を検査された後アドリスクはようやく目を覚ました。

城の二階にて待たされた三人は大臣に言われ玉座の間へと案内された。

「起きたらすぐに謁見とかなんだよ——はあ、マルカぐれぐれも粗相のないようにな」「わかってるわよ」

アドリスクが諭すように言うとマルカはそつっぽを向いた。

「大丈夫次は僕も頑張るから」

胸の前で拳を固めるのはマルカの隣にいたラルスだ。上目づかいでアドリスクに一瞬だけ視線を走らせた。今度は自分が守るという意味だろう。

「着きましてござります」

大臣が扉を開き、かがんで玉座の間へと腕をはべらせる。

赤い絨毯が入り口から玉座へと続き、きらめくシャンデリアが部屋全体を白を基調とした優しい光で照らしていた。

「よくぞ来た『賢者の使徒』よ」

中に入ると部屋の中にはソルクトルム王ただ一人だった。王女の席には誰もおらず、大臣は「わたしはこれで」と言い、すぐにして行つてしまつた。三人はゆっくりと歩み、やがて中央に着くとそのまま膝をついた。

「お久しぶりでござります」

「おお、アドリスクか……そなたの祖父には助けられたものだ」

「勿体なきお言葉感謝いたします」

よく城に来ていたアドリスクは慣れた口調でソルクトルム王とあいさつを交わす。とはいゝ、先代の王が亡くなつてから一度も訪れていなかつたので、少し緊張していた。

「そうかしこまるでない、アドリスクよ。わしの中ではお主は次代の英雄、なにせたつた五歳でサラス大森林を氷漬けにし魔物を一網打尽にしたのだからな。わつはつは」「いえ、そのような事は……」

苦し紛れに答えるアドリスクは下を向きながら悲痛な顔になる。十二年前のあの事件は意味が分からぬし記憶も曖昧だがはつきりしてるのはそれ以来魔法が使えない事だつた。

「わしもまだ王になる前だつたからなよく覚えておる。森に降りてきた魔物達をことごとく……」

振りしぶるようにして出した声は届いていなかつたのか王は身振り手振りを交えながらまるで自分の功績のように語りだす。

その様子眺めながら自分の黒歴史のような思い出に唇を噛んでいた。

「ねえ」

するとマルカが隣のアドリスクを肘で突き、耳元に手をかざした。

「あのバカ王子の姿が見えないんだけど」

マルカの横やりに少し安堵した様子を見せるとふむと顎に手をやつた。

「確かに——いつもならここでお前のこと『みぞうちババア』って言いながら出てくるのに」

マルカの天敵のクルリドはこの国の王子で次の王の予定だ。

しかしクルリドはよく城を抜け出したり、兵士に無茶な命令をしたりと国民の印象はあまり良くなかった。それに加えて、同じ年頃のアドリスクらと遊んでいたときに自分の王子という身分を武器にマルカが殴れないことを知りながらよくスカートをめぐり、その腹いせで周りにいた者が腹を差し出すことになつた。

「して、こんな時間にくるとはやはりそなたは賢者の孫だけなことはある今すぐ旅立つのであろう？」

「バカ——もといバカ王子がいつ出てこないか気を張つていると語りは終わつたらしく、顎鬚を触りながらソルクトルム王が満足げに言つた。

「その前に僭越ながらクルリド王子の姿が見えないのですが」

「クルリドか……眠ったよ」

「は？」

アドリスクは予想だにしていなかつた返答に思わず聞き返してしまつた。あの王子がこんな時間に寝るなんて想像できない。

「なんじやクルリドに用でもあつたのか」「いえありません」

なぜか露骨に不機嫌になる王に何も言えずアドリスクは場を流した。

少し沈黙した後、王は「んんっ」と咳をし神妙な顔つきに変わる。

「今から旅立てば先に行つた者たちにも追いつけよう、既に大臣に準備はさせてある」「そのことなのですが……」

本題にアドリスクは意義を唱える。城に来たのはアドリスクの意志ではないし、先に行つた『賢者の使徒』に追いつけるなどと楽観視してなかつたからだ。それに今は夜、いくら周辺の魔物が弱いとはいえ生態上、太陽が落ちている間は一層凶暴さが増す。

今年は辞めておきます。そう言おうと言葉を紡ごうとした瞬間、マルカが右手をそつとアドリスクの口元を抑えて、喉を鳴らした。

「その通りです、では早速私たちは準備がありますのでこれにて失礼します」

淡々と言葉を並べると、両腕で一人の首元持ち上げながら立ち、そのまま玉座を後にした。

扉が閉まるとき王は肩の荷が下りたように深々と息を吐いた。

「……それでよい、今年もお前たちが——くれてさえばこの国は救われる」

その独白は響き渡るばかりで誰の耳にも入らなかつた。

第Ⅰ章 3 王の思惑

場所はいつも決まってサラス大森林の跡地だった。

魔物が出ると言っていたが、二年前のあの事件で魔物は消え、その上森も無くなり今ではただの平原になっていた。

それでも木々は少し残つており、そのままに生える木の下に少年はいた。

背丈の半分ほどの木刀を力任せに何度も振り切る。その少年の剣裁きは当然ながら隙だらけで、このまま振り続けても付くのは腕力だけだと少年は気づかない。

時節、首元のペンドントが揺れ動く。何度も、邪魔だから外そうかと思ったか分からない。しかしあの祖父が絶対に外すなと念を押すので、少年が外することはなかつた。

木を背にし、一心不乱に腕を動かす——まるで剣に憑りつかれた様に。

自分にはもはやこれしかないのだと、それでもしなければ死ぬしかないのだと齡七歳ながら少年は悟る。

「……なるほど想像を超えた」

突然、声が聞こえ少年は手を止めた。透き通るような声に自然と居所を目で探す。しかし三百六十度見渡すが人影は見えない。そこで少年は頭上、木を見上げる。

刹那、木が揺れ動き素早く少年の目の前に何かが着地した。

それは、鉄兜、鉄の鎧、鉄の足枷等、鉄で塗り固めた四肢のある何かだった。

背丈は少年と同じ。しかし重さなんて関係ないように、素早く着地を決めた何かは最早人間業ではない。

「逃げないと」

先程まで妄執したように木刀を振つていた少年は逃げる事を決意する。だが目の前の化け物から逃げ切れる自信が全くなかった。

何もせずに立つて威圧された様に呼吸も荒くなり、震えが木刀にまで伝わる。

「背負う者はこうでなくては、だ」

何か言つているようだが少年には聞こえない。ただひたすらここから逃げ出すこと

を考えていた。

化け物が腰に手を伸ばす。その様子を静観し、いまだ動けない少年は自分の死を予感した。

しかし取り出したのは鉄の剣ではなく、少年と同じ木でできた剣、木刀。化け物は身構えると左腕を腰の後ろにやり、少年に向かつて一言。

「そう身構えるな。私は……そうだな、カルドとでも言っておこうか。君の師でありラ
イバルだ」

「お、おれはアドリスク」

呆気にとられた少年は思わず言葉を返した。

「知っている、君を知らない者はこの国にいない」

「——つ」

「賢者の孫にして、二年前の魔物襲来を事前に察知し氷漬けにした」

「……黙れ」

「君がいれば各地の魔物も殲滅できるだろう」

「黙れ」

いつしか震えも止まり少年の中はある感情で埋め尽くされていた。以前にも抱いた感情。

「なにせ森を一瞬で、だからね。いやはや歴史の軌跡をその場で見れなかつたのはひどく残念だ」

「黙れつってんだよ———」

怒り。少年はそのことを自覚すると踏み出し木刀で襲い掛かる。

「彼の言つた通りだ」

カルドと名乗つた鉄の騎士は、怒号と共に飛び出すアドリスクの首元を一瞥すると、目をつむつた。

「改めまして——私の名前はカルド。君の師でありライバル——だからそんなに敵意を

向けられるといささか困るのだが」

玉座から出ると、大臣が待っていたように首を垂れた。

「準備しておりました、ではこちらに。王より馬を与えるようとのご命令なので」「では少し待つてくれませんか、少しだけ」

「承諾しました、では一時間後中庭においてください」

「分かりました」

城を出て、さつきと違う兵士に怯えた様子で見送られると、三人はサラス大森林の跡

地へと向かつた。

開けた場所に着くとアドリスクは二人に座るように促した。

——最初におかしいと感じたのは、マルカの曖昧な行動だった。風邪で寝込んでいるという事は、マルカとラルスの二人しか知らない。もし、行くのであれば馬車にでも乗せて無理やり連れてていけばいい。それをせず、なぜこんな中途半端な時間になつたのか。

それに王の態度もおかしなものだつた。最初は上機嫌だつたのに、クルリドの名前を出した途端、急に不機嫌になり、そのまま急かすように話を進めた。

何者かの意図を感じる——とアドリスクは思つた。

「まず最初に……ラルス」

円になつて座つていると最初にアドリスクはラルスを見て言つた。ラルスは自分が呼ばれるとは思つていなかつたのか、目を丸くして「なにかな」と口にする。

「準備のために時間もらつたんじゃないの？ なんでこんなところに」「うるさいぞマルカこればっかりは譲れない」

アドリスクの強気な口調にマルカは思わず肩をすくめた。中断された会話に怒りが込み上げそだつたが、一呼吸おいて再びラルスと向き合つた。

「お前今日行く出発することは自分の意志か？ 一週間前にレストランが失踪した事は知つているな」

「もちろんだよ」

「じゃなんで行こうとする？俺たちは四人で行こうぜって約束した。でもレストランがいねえから今年は素直に皆に混ざろうってなった。悔しいが同年代の中でもあいつの能力は飛びぬけてるからな。でも昨日まで俺は風邪ひいていた。

来年は知らないやつらと行くのかと思つていた。だからお前たちが残つてくれていたのはすごく嬉しかつた」

「もう一度聞く。どうして今日で今なんだ？資格は十七歳以上だから来年でも行けるつてことは子供でも知つてる」

ラルスは露骨に視線を泳がせ、やがてある一点にたどり着く。

「ごめんねマルカ」

「ラルスは隠し事苦手だもんね。しようがないよ」

ラルスの視線の先には、月夜の下で映えた紫色の髪があつた。

「マルカ」

「そんなに怒らないでよ殴るわよ」

意気揚々と答えるマルカに苛立ちを募らせるアドリスクはいちど深く深呼吸し、マルカに向き合う。

「来年行くことにはならないか?」

「王様にも宣言しちゃつたしダメでしょ普通に。それにレストランに次いで剣が一番扱えるあんたが起きたらすぐに行くことになつてているんだから」

「……行くことになつている?」

「そーそー、皆に『賢者の孫は目覚めしたいすぐに君たちに追いつくから安心して向かうがよい』って王様が

「王様が……」

なるほどやけに謁見が短いと思つたらやつぱりか——それに。

「うんだから私たちは早くいかないと」

「……マルカ俺に隠し事あるだろまだ」

「な、ないつて何も」

「とぼけんなよそもそも俺が風邪なんて引いてなかつたらこんな事態にはならなかつただろうが！ それに『賢者の使徒』の三年前までの奴らが一度も国に帰っていない。だからこそ生存率を優先すべきじゃないのか」

「じゃあ、王様がこうなるように仕向けたとでもいいたいわけ？」

「ああそうだ」

あの睡眠薬。あれになにか仕込んでおいたのだろう。意図は多分『賢者の使徒』とアドリスクを引きはがすことで生存率を下げるためだとアドリスクは思った。もし仮にそれがただの睡眠薬でたまたま風邪引いたとしても皆の事を考えれば日時を改めていたはず。少なくとも先代の王はそうしたんだろう。

マルカは、観念した様子で口を開いた。

「仕向けたのはあんたの言う通り王様だけど目的までは分からぬ
「目的が分からぬ？」

「そう、私が命じられたのは目覚めたあんたとラルスを連れて王と謁見し、賢者の使徒に追いつくことだけだから」

「本当か」

「殴るわよ」

「ごめんなさい」

責められている間でも常に相手の上を立つ。流石はマルカ——じやないじやないとアドリスくは自分の黒髪を左右に揺らす。

「じゃあさ早くいかないとまずいんじやない?」

「ああ、王様の意図が分からぬ以上もう会うことはできないし早くあいつらに追いつかないと」

ラルスが心配したように言うとアドリスくが神妙な顔つきで同意する。

「三十分後城門前に集合だ」

第Ⅰ章 4 出発

「三十分後城門前に集合な」

とは言つたものの、マルカは愛用している武道着をすでに着ていたしラルスも、孤児院の人とも挨拶を終え、院長先生からもらつたというかしの杖と絹のローブを装備していた。アドリスクも一昨日には準備を終えていたので結局三人で町の知り合いに別れを告げることになった。

「じゃ最初はマイナンのとこに行くか」

アドリスクの言葉に二人が頷くと、サラス大森林の跡地を後にした。

マイナンはアドリスク達と同じ年で、防具屋を継いでいる。二歳上の兄がいるのだが『賢者の使徒』として旅立つて以来帰つてきていなかつた。

「あれ、なんでまだいるの？」

防具屋に着くと三人の姿を見てマイナンが疑問を口にした。

「あはは、ちよつと野暮用でな」

「ふーんそーなんだ」

アドリスクが適当にごまかすと、マイナンはそつけない態度を取つた。それからマルカとひとしきり談笑した後、今朝入つたという青銅の盾をただでもらつた。

「いいのか、もらつて」

「あげるから旅先でマルコス兄さん見かけたら無理やりにでも連れ帰りなさい」

ぶつきらぼうに見えて案外兄のことを心配しているみたいだとアドリスクは思った。

「ありがとなマイナン。マルコスさんがいたら言っておくよ」

それから武器屋のおじさんにあとを告げ、城の中庭に進んでいった。行くと大臣は、

馬を一頭連れて、アドリスク達を待つていた。

「すいません残っている馬がこれしかなくて」「こ、これは」

その馬はアドリスクの祖父が譲り受けたカストコという名前の馬だった。体格はほかの馬よりも少し小柄だが、力強く地を蹴り、馬力も相当なものだつたそうだ。馬の寿命は二十年いけばよいのだが、カストコは既に五十年生きている馬だつた。なるほどさすがは賢者に選ばれた馬だけのことはあるとアドリスクは考えていたのだがその馬に昔のような威風堂々とした様子は見られなかつた。

「ブフー、ブフフーーー」

呼吸は荒く、体も辛うじて立つてゐるというような出で立ちだつた。これではさすがに荷物などを運ぶ馬車としての役割は果たせそうにないと三人は顔を見合せたが、大臣は嬉しそうに少し出張つた腹を叩いた。

「今はこのように死にかけですがね。賢者様の孫と旅が出来るとくればカストコは以前のように魔物の前でも怖気ず、炎の山でも颯爽と走り抜けることでしょう」

よくもまあそんな話がすらすらと出るなとアドリスクは感心したもののだが他に馬はないということなので、カストコを連れ三人は夜のソルムトルク城を抜け、その足で隣町ラスペスタにつながる洞窟へと向かった。

第Ⅰ章 5 不安

夜、真っ暗な中、いつ魔物が出てきてもおかしくはなかつた。さつきまで出ていた月の光は雲で隠れており、聞こえてくるのはカストコの息遣いだけだつた。この辺りはスライムやドラキーなどの、油断しなければ勝てるといった弱い魔物しか出ないことは知つていたが、それでも三人は警戒しなければならなかつた。

「もうすぐで洞窟かな。このまま何事もないといいけど」

「ああ、そうだな明かりが見えていたし」

「ええ……そうね」

ふとラルスが沈黙を破つた。だがあと二人は曖昧な返事をした。

アドリスクは魔物の生息地に入つてからずつと違和感を抱いていた。夜は魔物が最も活発になる時間帯である。昼間よりも凶暴化し、夜に好んで町や村を出る冒険者はまづいない、全滅する可能性が高いからだ。だがソルクトルムからここまで一切魔物が出ていない。そのことがアドリスクの警戒を強めていた。

「こんなに歩いて出てこないってのはどつかの商人が聖水をぶちまけたのかそれとも……とんでもなく強い魔物がうろうろしてんのかのどつちかだな」

「私としては商人のうつかりに期待を寄せるわ」

「みて、二人ともチャランだよ」

アドリスクとマルカが可能性について思案していると、ラルスが明かりの方を指して、笑顔で駆け寄つていった。ゆっくり荷物を引いてくれているカストコに合わせ進むと、洞窟の前には制服に身を包んだ兵士の姿があつた。チャランは『賢者の使徒』ではなく兵士になることを選んだ青年で、アドリスクに例の薬を届けた張本人であつた。

「チャランだつたら何か知つているんじやない？　あんたの推理が正しければ王様とグルつてことだし」

近くまで行くとアドリスクにマルカが耳打ちした。彼もそれは考えていたようで、何故か苦笑いを浮かべるラルスを押しのけて切り出した。

「おい、チャランお前がくれた例の薬だけど……」

「よくぞきた賢者の使徒よ、さあ中に進むがよい！」

「いやだからお前がくれた……」

「よくぞきた賢者の使徒よ、さあ中に進むがよい！」

「こうなつたら」

「よくぞきた賢者の使徒よ、さあ中に進むがよい！」

「んん、魔法の力ギをつかいまほう！」

「よくぞきた賢者の使徒よ、さあ中に進むがよい！」

アドリスクの渾身のダジヤレも空振りに終わり、ここでようやくラルスの表情の意味がぐみ取れた。

「僕も話しかけたんだけどね、同じ話しかしないんだ」

チャランのことをよく知る二人は眉をひそめた。これはもう異常であつた。魔物がないことと何か関係があるに違いない、しかしここで足を止めれば『賢者の使徒』に追いつく事が出来ない。どうしたものかと悩んでいるとマルカがカストコの手綱を離

し、チャランに詰め寄った。

「私つてほら自分で言うのもなんだけど馬鹿じやない？ 時間もないしね」

「よくぞきた賢者の使徒よ、さあ中に進むがよい」

「だからさあこういう解決方法しか思いつかないんだよね」
「おいまて、マルカまだ何が原因かわからんなんだぞ……」

「フンツ」

こうしてマルカはアドリスクの予想通り、うわ言のように繰り返すチャランのみぞを殴つた。正確にはこぶしを突き出したという方が正しいだろう、ともあれ彼は白目になり胃の内容物を吐き出した。正面にいたマルカは長年の経験からか、すぐに横にスライドするように立ち退いたので被害は皆無だつた。

「……」

二人が呆然と立ち尽くしていると、マルカは悪びれもせず「やつぱり兵士の服つて耐久性低いわね」などとぼやいていた。

「どうすんだよこれから」

アドリスクは額に青筋を立てて、見下ろしていた。完全にのびたチャランをどうしようか。恐らく魔物などに操られていた友人をこのまま置き去りにする訳にもいかない。アドリスクがうなつていると、ラルスがカストコから荷物を降ろし始めた。

「だつて僕たちもどるわけにもいかないし、かといつてチャランをこんな魔物の生息地に置いていくわけにもいかないからカストコに連れて戻つてもらおうよ」

「確かにそれしかないかもな、それにもし魔物と戦闘になれば巻き添えを食うだろし」

アドリスク達はカストコを見送ると、そのまま洞窟に入つていった。

「洞窟の方が明るいとは……」

「ここは普段、ソルクトルムと他の土地を繋ぐ唯一の道だからね。なんでも道を照らす明かりは特殊な鉱石が使われているらしいよ」

「でもなんでこんなに穴だらけなわけ?」

「もともと軍隊アリの住処だつたみたいで、その名残が今でも残つてゐるみたい」

その洞窟は一本道だが、左右には穴が開いており好奇心で進もうとすれば、後に骸骨となつて発見されることがあるほど入り組んでいる。馬車が四台平行できるほどの巨大な道は舗装されているものの、今は三人の足音しか聞こえてこない。

「なあラルスいつになつたら出口に着くんだ?」

「入つてから、ずいぶん経つたから……皆静かに」

言うとラルスは口元に人差し指を置いた。いつになくこわばつた顔に二人も口を閉じた。

「ズズズ、ズズズ、ズズズ……」

「……なんだこの音は、何かをひきずつているような」

音が聞こえる。三人は入口の方を振り返つた。

第Ⅰ章 6 窮地

カストコ——勇者ヘクトル、賢者ルルムソクトリウエンディ、そして最後まで素性を明かさなかつた、エドバニア王国団長の戦士とともに魔王ロクタス打倒の為、野をかけ、山を駆けた名馬であつた。

もちろん冒険は大変だつた。魔物の攻撃を受けることはざらだし、何より強大な敵を前に三人を安全な場所に移すということもあつた。

しかし、数十年前に魔王が倒されてからカストコはソルクトルムに預けられた。

——自分はもつと走りたいのに

そんな願いも届かぬまま、ウエンディは旅に出て、ヘクトルと戦士はそれぞれの国に帰つてしまつた。

——走りたい

ただそれだけなのに、王国の者はカストコをあまり走らせたくなかつた。

英雄達の馬に何かあつたら——というのは建前で、カストコの食費を削るためにだつた。他の馬よりも体躯は小さいがよく食べるため食費が馬三頭分に値する。走れば当然食べる量も増える。そのため、カストコの筋力は全盛期とは比べ物にならないほど落ちていた。

先代国王は、自分の代でカストコが死ぬだろうと思いサラス大森林を自由に駆けまわせていたものの、先に国王が死んでしまつた。

だから今日、外に出るのは久しぶりだつた。今の国王は外に出ることすら許さなかつた。

カストコは一目見たときアドリスクがウエンデイの血縁の者であると分かり、歓喜したと同時に落胆した。

——もう自分には何もできない

そのことが悔しかつた。もつと早く来てくれていたら君たちと一緒にどこへだつて行けたのに。

歩くことさえおぼつかない。荷物を持つだけで精一杯。足手まとい。

チャランを運び終えた、カストコはソルクトルムの外で座り込んでいた。もう先は長くないと自分が一番わかつていた。これ以上迷惑はかけられない。

しかしふと昔の記憶が蘇ってきた。

——それはいつだつたか……確かウエンディが旅経つ前か。

『カストコすまないな、お前はここで留守番だ』

『そう嫌そうな顔するなよ』

『今回は個人的なことだからな、あれは夢だつたかもしれない幻だつたかもしれない。

だけどわしは再び世界が闇に包まれるのなら、できる限りのことはしておきたい』

『だからもしお前がアドリスクについていくことがあつたら、その時は……』

——お前の足でアドリスクを助けてくれないか？

カストコは立ち上がった。そして洞窟にめがけ走つていつた。
寿命だろうが筋力がなかろうが、歩みを止めることはない。

その姿こそまさしく英雄の馬に違ひない。

「エツサホイサ、エツサホイサ、エツサホイサ……」

入口付近で不可思議が音が生じていると気づいた三人は穴に隠れこれからどうするか考えていた。

「なんか仕切つてるのがキラーピッケルだよな……ピッケル持つてるし」

「うん、あの灰色？ 大ネズミみたいな色の岩を押してるのがいたずらモグラだと思
う」

「ねえ、ぶん殴つたら終わりじゃないの？」

音の正体はいたずらモグラ達が入口を塞ぐほどの大きな岩を押していることだった。

いたずらモグラは二足歩行の魔物で、普段はスコップを手に襲つてくるのだがその武器はどこにも見当たらない。

キラーピッケルはその名の通りピッケルを手に黄色いヘルメットといういで立ちでどちらもアドリスクの身長の半分の大きさしかなかつた。

いたずらモグラが六匹、キラーピッケルが一匹。いたずらモグラしか押していないことを考えると恐らく監視役か何かだろう。ならばそいつを倒せば何とかなるというのがマルカの意見だつた。

「だがああ、そもそもあいつらに入口を塞ぐメリットがあるのか？」

「殴つてから考え方

「いやいや、マルカそれはいくらなんでも……」

「僕はマルカに賛成かな」

アドリスクは耳を疑つた。

「ラルス本気か？ これまでの道中ほんとにおかしなことばつかだぞ。魔物は出てこないは、チャランはおかしくなつてるわ、出てきたと思ったら岩押しては、明らかに俺

たちを狙つて いるとしか考えられない』

「うん、だからこそだよ。僕たちを狙つたのなら当然同じ括りで出発した『賢者の使徒』も狙われているはず。ここであいつらを倒したら何か情報が掴めるかもしない。早く追いつくためにも情報はあつたほうがいい』

「そ、そう私もラルスと同じ考えだつたわ。うん』

——ラルスの意見は最もだな。マルカ？ 誰だそいつは？

「よし分かつた。ラルスは援護を頼む。でも補助の呪文はかけなくていい回復優先だ。マルカはキラーピッケルを頼む俺はいたずらモグラどもを倒すから』

言い終え目くばせすると、入つていた穴からまずマルカが飛び出した。

キラーピッケルが気づいた時にはもう懐にはいつており、マルカは回し蹴りをくらわせた。

「魔物にもみぞつてあるのかしら』

「隊長、隊長」

いきなりの出来事にいたずらモグラ達は手を止め、キラーピッケルに駆け寄ろうとする。

が、先行していた一匹が空中に飛ばされたのを見て、いたずらモグラ達は固まつた。

「悪いな、あいつはタイマンじゃないと調子でないみたいでな」

飛ばしたアドリスクは剣を構え戦闘態勢に入つてゐる。悟つたいたずらモグラ達は倒された仲間の為一矢報いようと相棒のシャベルを……

「ああ!、アジトに置いてきちゃつたよー」

「ほ、ほんとだ……俺たちどうしよう」

「どうするもこうするもないよーーー」

一匹は頭を抱えて走り出し、もう一匹はその場で頭を押さえしゃがみ、残りの四匹は飛ばされた一匹を介抱し始めた。

「な、なんか調子狂うな……」

「アド、こつちは終わつたわよ」

言つて、ボコボコになつたキラーピツケルを乱暴に放り投げた。

「なんなの？ この状況は」

「俺にもわからん」

「僕に任せて」

念のため隠れていたラルスは言うと、魔物の治療を始めた。

「神よ。この者に癒しの力を……ホイミ」

終える頃には、いたずらモグラ達は一心にラルスを見た。

「ど、どうして治療を？」

「そ、そうだよ俺たちはあんたらを閉じ込めようとしたんだぞ」

ラルスは普段孤児院の子供たちに接するように腰をかがめ優しい声音で言つた。

「だつて君たちは悪い魔物じやないでしょ？　ごめんねアド、マルカ」
「いいぜ、ラルスのお人よしは今に始まつたことじやないし」

それから傷が治つた彼らは熱望したようにラルスを見つめた。

「世の中にこんなにいい人間がいたなんて」
「俺たちは彼らになんてことを……」

真摯な心に打たれたのか、ラルスの言葉にいたずらモグラ達は涙を浮かべ各々懺悔を並べ立てた。

「すまねえ。いくらあいつの命令とはいえ……」

キラーピツケルがはヘルメットを脱ぎ、頭を下げる。

「いいよ。それよりもあいつって？」

「俺たちは元々、ここで穴を掘つて地下にあるアジトでボスのもと平和に暮らしていたんだ。それが三年前……」

ドドドツ——ーン

キラーピツケルの言葉を遮る形で地響きが鳴つた。すると彼は、目の色を変えた。

「ま、まざい。あんたら早く逃げろ。まだ入り口は半分ぐらいしかふさがつてねえ今なら大丈夫だ」

「おいあいつって？」

「説明している時間はない。俺たちはあんたたちを殺したくない」

「でもきみたちはどうするの？」

「もう失敗したんだどのみち始末されるのがおちさ……早く行つてくれ」

「わかった……けど兵士の人連れてくるから生きててね」

アドリスクは『あいつ』の正体に執着の色を見せたが、ラルスに手を引かれマルカとともに入口に向かつた。

さつきの地響きは何だつたのか？ あいつとは？ 疑問が増え、ますます不安になつたアドリスクは思わず険しい顔つきになる。

それよりもここを出でどうするか、道はこの洞窟しか無い。しようがないが兵士に力を借りるしかない。

その時だつた。

「おい、伏せろ！」

後ろから聞こえた言葉に三人ともとつさにかがんだ。

「ゲツハツハツ。惜しい惜しい」

かがんだ後に、目の前から先程聞いたものが聞こえた。飛んできたのは大きなこん棒だつた。

三人が振り向くとそこには下卑た笑いを浮かべた緑の巨人が立っていた。

第Ⅰ章 7 ポストロール

その姿は緑の体、皮でできた赤紫の布を肩から腰回りに巻き、右手のこん棒から振り下ろされる重い一撃は数多の冒険者たちを地獄に送り込んできた。

本来、ソルクトルムとラスペスタを繋ぐ洞窟は行商人や国の偉い人などが使用するため出入り口にはトヘロスがかけられており、周辺の魔物は弱いこともあって入ることはおろか、近づくことさえない。

そんな洞窟内では現在、いるはずのない緑の巨人ポストロールがアドリスクtたちの目の前にいた。

「キラーピツケル。何をしている？ 本当なら入口の封鎖は終わっているはずだが」

「うるさい。俺たちはもうお前には従わない。今まで通りボスと暮らすんだ！」

こん棒を投げつけた後、ポストロールは下卑た笑いを浮かべ言つた。幸いにもこん棒は壁に当たりけがをするものはいなかつた。

三人が唖然とする中、キラーピッケルは勇敢にもボストロールに言い返す。いたずらモグラ達も「そーだ！ そーだ！」と口々に叫んだ。

「もうお前の指示には従わない！」

「いーいーのーかー？」

キラーピッケルがなおも気迫を込めて言うと、ボストロールは腰に手をあてた。

「俺様は『賢者の使徒』抹殺のためお前たちのボス、ドンモグーラに代わり大神官ゴラマス様によつて遣わされたんだぞ。貴様らが歯向かえれば治療中のボスはどうなるかな？」

「……ツ」

「ガーアハツハ。わかつたらさつさと入口を塞げ！」

「すまない『賢者の使徒』の子供たちよ」

三人は黙つて事の成り行きを見守つていた。

『賢者の使徒』抹殺つて……どうやらあいつが原因みたいだな。もしかすると先に行つ

たやつらはもう?」

「うん考えたくないけど……」

「くそ!」

アドリスクは唇をかむ。相手との力量の差は彼でも十分に分かつた。いくら修行したとはいえ勝てる見込みがなかつた。

しかしアドリスクは後ろの二人を見る。ラルスはかしの杖を両手に抱え、ブルブルと震えている。マルカは膝立ちの状態でポストロールを見つめているが、その瞳からは怯えているのがうがかる。

明らかに戦意喪失寸前の二人を見てアドリスクは立つが、足は震えていた。

「まあそう怯えるな『賢者の使徒』よ。まずは話をしようじゃないか。話つてのはいいもんだ。互いに意見をぶつけ合い、互いを分かり合える。世界平和は対話から始まつていくと俺は思うのだ」

後ろの岩が運ばれる音をバックにアドリスクは耳を傾けていた。

「そ、そうかこん棒持つてるから、てつきり襲われるのかと思つたぜ」

「ああ、これは念のためだ、念のため」

ボストロールはいたずらモグラにさつき投げたこん棒を持つてこさせるように命じていた。

「自己紹介が遅れたな。俺はゴラマス様の部下ランドンだ。

俺はお前たちのことは知つているがお前たちは俺のことは知らないだろう。対話というのは対等な関係でなければならん。いくつか質問を許そう」

——今俺がするべきなのは、二人をここから逃がすこと。しかし着々と岩によつて入口が狭めらている。質問とやらを長引かせてこいつらが回復するのを待つしかない。

——落ち着け

——落ち着け

——俺が間違えれば三人とも死ぬ

「ランドンお前俺たちが何者なのか知つているのか?」

「ああ知つてゐるとも、そしてお前たちの中にルルムソルク＝アドリスクがいることもな」

「そうか。じゃあ次の質問だ。俺たちより先に来たやつらはどうした?」

「あいつらか。全く困つたものだつた俺の姿を見るなり逃げ出すのだからなおかげで見つけるのに苦労した。

「どうしたか？」
といふ質問だつたな。その問い合わせは殺したといつておこう」

「……せんいんか」

取りこぼしがなければな

ラルスはアドリスクが剣の柄に伸ばそうとした右腕をつかんだ。

「アドリスク僕たちは大丈夫。だから一旦落ち着いて」

左手には心配そうにアドリスクを覗き込むラルス。右手にはマルカの凛然としたすがたがあつた。

「私も大丈夫だわ。さつきの一言で逆に冷静になつたわ」

「そうか」

アドリスクが二人が回復したのを見て安心したように呟き、それから入口を見た。

「一人通れるか通れないか微妙だな」

入り口の封鎖は思つたよりも進行しており、ここから脱出するのはもはや絶望的であつた。

「どうしたもう質問は終わりか？」

「いやまだだ」

「……ほう」

「入り口にいた兵士様子がおかしかつたんだが、あれもお前の仕業か？」
「そうだ。そしてお前に夢見の花をすりつぶした粉を飲ませたのもな……」
「は？」
「いやあれは宫廷魔法使いが作つたものじゃ……」

「違うぞ。若者よ、そもそもそこにいるアドレスクを一人で来るためには仕向けるものだつたのだ」

ランドンは大げさに首を横に振り、ラルスを指さした。

「だがふたりついてくることは想定外だつたがな」

――「いつ、俺がアドレスクと知らないのか……なら

「二人とも話がある」

「なによ。言つておくけど私逃げないわよ」

「……僕も」

その発言にアドレスクは目を見開いた。

「そりやあ、何年もいるんだからあんたの単純思考なんてわかるわよ」「だけど――三人がかりでもどうしたつて……」

「いつもみたいに私が気絶させるわ」

寸分違わず真顔でそんなことを言うものだからアドリスクは思わず笑みをこぼした。

「いつもお前はそうだつたな。悪い最後まで付き合つてくれラルスもな」
「うん」

二人の覚悟を見て、静かに瞳を閉じる。

「おい、ランドン続きだがお前はいやお前たちは一体何をしたんだ？」

「なに、たいしたことではないちよつくり王様を脅しただけだ。国が惜しければ生贊を差し出せとな」

「……いつからだ！」

「そうだな——丁度三年ほど前だな」

「その生贊がまさか」

「さすがアドリスク、賢者の孫といったところか。そう生贊というのが毎年のこのことやつてくる『賢者の使徒』というわけだ」

察したラルスは、自然に言葉がこぼれた。

ランドンはこん棒をなめる仕草をすると、三人の後ろを見た。

「どうやらしゃべっている間に工事が終わつたようだな」

振り向くと、いたずらモグラ達は泣きながら岩を押している。

ところが入口がふさがるまで残り数秒というところで洞窟内にカツツ、カツツと軽快な音楽が鳴り響いた。

「この音は？」

三人は振り向いたまま、その音に疑問を覚えていた。

「ごめんよ。ごめんよ」

「くそ——」

「ボス助けてくれよ——」

余談

泣き叫ぶ声が反響してそこら中に響き渡る。
近づいてきた音は、ようやく三人の耳に馴染む音にかわる。

——そして

ヒヒ————ン

実は百年以上前に、人間たちが洞窟を使用する際、軍隊アリを倒す必要があった。その時すでにモグラ達は地下にアジトを作つており運よく発見されることはなかつた。往来する人間が増え、別に拠点を作ろうとしたものの、出入り口には常に兵士がいたので出ることはできなかつた。

それでもまあ時折、人間が落とした楽器を拾つては音を奏でているのでそれなりに楽しくやつているようである。

年に数回、馬が洞窟を嫌う日があるのでその日人間は近づかない。うめき声が聞こえるのだとか。

第Ⅰ章 8 約束

『カストコすまないな、お前はここで留守番だ』

『そう嫌そうな顔するなよ』

『今回は個人的なことだからな、あれは夢だつたかもしれない幻だつたかもしれない。だけどわしは再び世界が闇に包まれるのなら、できる限りのことはしておきたい』

『だからもしお前がアドリスクについていくことがあつたら、その時は……』

ヒヒ———ン

軽やかなひずめの音が聞こえる。声の主は入口の僅かな隙間から顔を出した。

「……カストコか？」

アドリスクは言葉にするも確信が持てずにいた。ほんの数十分前までは死にそうちつた馬が着くなり、その小さな体躯で岩を押ししているのだから。

「えええい、何をボケツとしとる。貴様うさつさと押し返さんか」

そんなランドンの警告もむなしく、カストコは自分が通れるほどの隙間を作ると、いたずらモグラ達を跳ね飛ばしながらアドリスク等三人のもとに着いた。

「一体何があつたんだ……」

「ありがとうカストコツ」

アドリスクは啞然とし、ラルスは嬉々としてカストコをなでる。しかし彼はすぐに正気を取り戻し、意を決したような顔つきになる。

「よし二人とも逃げるぞ」

「『え!』」

「いいが。脱出方法が確保された今、ここにとどまる必要はない。それにカストコがここにいるつてことは、チャランの異常に気付いた兵士が来るだろう。あとはそいつらに任せればいい」

「でも……アド自分の手で倒したいんじゃないの?」

「私も怒りが収まらないわ」

「当然その気持ちはある。だけど今の俺たちには敵わない。悔しいけど適材適所つてやつさ」

アドリスクはお手上げといった様子で手を挙げた。三人は詳しい作戦を決めた後、改めて強大な敵ランドンを見上げる。

「まあイレギュラーはあつたが、これでお前たちは俺のことを知ったということだな。ふむこれで対等に会話できる」

三人の作戦はこうだった。

「いいか？　すでに入口は塞がれちまつた。あと残つてゐるのはランדוןの後ろにある出口だけだ。カストコには三人乗れる」

「だけど、いたずらモグラ達はともかくランדוןの隙を付かない限り通り抜けるなんて無理だと思う」

「そこは安心していいぜラルス。俺にとつておきの策がある」

カストコが通り抜けた後、いたずらモグラ達は入り口を塞ぎ、それぞれ穴へと入つていつた。キラーピッケルは最後「すまねえ旦那方」と悔しそうにつぶやいた。

「ん？　どうした三人でそんな老馬に乗つて。互いのことは分かつたのだ、これからは対話の時間だろう？」

「おいガストンその対等な会話つてのが終わつたらどうすんだ？」

「ガツハツハ。決まつてゐるだろう。そなたらをぶつ殺す。だが——アドリスクだけはゴラマス様に捧げるとするか」

「そうか。それを聞いて安心したぜ」

言つてアドリスクはカストコから降り始めた。

「さあ行けカストコ！ 一人をラスペスタまで運んでくれ！」

「ヒヒーーーン」

アドリスクの命令を受けカストコは地面を蹴つた。

しかし当然ながらその行く手には……。

「残念だ、若者。そして仲間の命をかえりみず自分だけおめおめ逃げ出そうとは……アドリスクよ本当に貴様十一年前サラス大森林を氷漬けにした賢者の孫か？」

「おまえさつき言つたな互いのことが分かつた上ではじめて対話が始まると」

「そうだ。しかし若者よ、その話はあとだ。予定を変更してこの虫けらどもを叩き潰すとしよう」

ボストロールは右腕を振り上げてその先にいるマルカ達めがけてこん棒を振り下ろす。

が、ある言葉によつてその動きは止まつた。

「ランドン何か勘違いしているようだが俺がソルクトルム＝アドリスクだぞ？」
「は？」

とても信じられないという顔をし、止まつたままの姿勢ではまずかつたのか大げさに
転んだ。そしてそのまま指をさし叫んだ。

「おま、お前、明らかに戦士だろう！」

「ああ、魔法はもう極めたからな、魔法も使って打撃力もある、万能に動ける人間になり
たくてな」

城の兵士の増援など期待していない。王様と魔物はグルなのだ来るはずなどない。
それを承知で送り出したのはやはり――

「あんなこと、言つたがここで引いたらこの先魔物退治なんてできないだろ」

彼が旅に出る決心をしたのは、十一年前のこと�이尾を引きずつていて。魔法が使えな
くなつて以降ひたすらに剣技を磨いてきた。周りの評価は高いこともあり、彼は各地に

いる魔物討伐の為に『賢者の使徒』に参加したのだ。
アドリスクは一人ほくそ笑む。

「強敵との一対一か。カルドなら『おもしろい』とか言うんだろうな」

ボストロールは立ち上がると、激しく憤慨したように右足を叩きつけた。

「ぐぬぬ。どいつもこいつも馬鹿にしやがつて、まずは貴様からその息の根を止めてや
ろう！」

「おいおいランドンお前死ぬのはお前の方だぜ。俺の極大魔法で氷漬けにしてやる」

アドリスクに勝機があるとすれば、彼が魔法が使えないことをランドンが知らないこ
とだ。このブラフが通じれば……と淡い期待もむなしく――

「ガツハツハ。アドリスクよ、貴様にはとつておきをプレゼントしてやる」

「なに？」

ランドンは股間をまさぐると一つの球を取り出した。

「静寂の玉！ 憎きアドリスクの魔法を封じよ！」

闇の光があたりを包む、掲げられた左腕の先には紫の玉が淡く輝いている。

「ガツハツハ。これで貴様は一切の魔法は使えない」

「お前の余裕はそれだったのか……だがな」

鋼の剣を構える。

「これまで殺された『賢者の使徒』のため、改心してくれたいたずらモグラ達のためにも
ランドンここで貴様を切る！」

余談

アドリスクの装備は、鋼の剣、青銅の盾という上級な装備にもかかわらず、帽子はかぶつておらず、鎧といえば旅人の服です。アクセサリーとして首に盾をかたどった赤い宝玉をつけています。

ラルスは絹のローブとかしの杖、マルカは武闘家の服だけです。

ラルスは、回復呪文ホイミと、敵の守備力を下げるルカニ、そしてバギと僧侶としてテンプレな魔法を身に着けています。

マルカは正拳突き。

正拳突きです。これしかできません。

第Ⅰ章 9 一対一

「よつと！」

アドリスクはランדוןの攻撃をバックステップでかわす。そしてランדוןの隙をついて、鋼の剣で足元を集中的に狙つた。

「おのれ、ちよこまかと動きよつて」

言うと、ランדוןは再び太い右腕を背中の方までやるとこん棒を振り下ろす。しかしその所作はアドリスクにはスローモーションにしか見えず、軽々とかわされてしまう。地面を叩きつけたことによる砂塵は、彼の持つ青銅の盾によつてガードされ現在アドリスクには傷一つ、ついていなかつた。

「これなら行ける！」

ランドンの足を斬る斬撃とともにアドリスクは呟く。

「ぐおつ」

ランドンは苦しそうに、顔を歪める。

戦闘が始まつて以降、ずっと右足ばかり狙つていたので、ランドンが膝を着くのは時間の問題だつた。

「どうしたランドン口数が減つたみたいだが」

「黙れ！」

いくらか余裕が出てきたアドリスクは、既に冷静さを失つたランドンを煽る。それによつてさらに動きが単純になるのだから、ますます戦いやくなつた。

「はつ」

「くつ」

「これでもくらえ！」

「ぬおおおお」

「遅い！」

「ぐ……ふぐう」

まるで流れ作業のような攻防にやがて終わりが見え始めた。ついにランドンの膝を地面に着かせたのだ。

「休ませるか！」

アドリスクはランドンが膝を着くと、体を駆けあがり両目を切り裂いた。

「目が、目がああああああ」

両目を抑え、悶え苦しむ。ランドンが回復魔法でも使えばその苦しみからは解放されるのだが、そもそも辺り一面には『せいじやくのたま』により魔法が使えなくなつないので彼は血がしたたる目元を抑えるしなかつた。

「なんだか拍子抜けだな。こんなやつにみんな負けたのか」

アドリスクは言うがそれは仕方のないことだった。誰も彼もアドリスクのように一生懸命修行していたわけではないのだから。

一人嘆息すると、ランドンに歩み寄る。

「お前には色々訊きたいが、思った以上に頭に来ているみたいでな。今すぐお前の息の根を止めたい。死んでくれ」

怒りを込めて淡々とした口調で話し、それから倒れているランドンの頭を貫こうとアドリスクは柄から剣を取り出した。

——だが

剣を構えてアドリスクは硬直した。

既に立ち上がることも目を開くことも出来ないはずなのに最初に会った時と同じような笑い声をあげたからだ。

「ハツハツハ。さすがは賢者の孫というわけか、魔法だけではなく剣にまで精通しているとは」

アドリスクは数秒固まっていたが、すぐに軽口を返した。

「なんだそれが遺言か？　お前にしてはずいぶんと短いみたいだが」

ランドンは笑いながら股間に手をやり何かを取り出し、それを口に運んだ。その赤い何かを咀嚼する——

みるみるうちに傷が塞がっていく。

その様子を見てまずいと思つたアドリスクは一旦下がつた。

「何だあれは。果実のようにも見えたが……傷が塞がることは別に問題じやない。その副作用としてあいつの体が変色していることだ」

この際、傷が治ることには目をつむり、ランドンの色が一瞬で闇をまとつたような黒

になつたことにアドリスクは警戒していた。

傷を治すというのであれば彼にもいくらか心当たりがある。

「あんなまがまがしい……氣か？ 魔力か？ とにかく正体が分からぬ以上うかつに飛び込むわけにもいかない」

アドリスクは後退する。

パワーアップしたということも考えられるが、普通一瞬で傷が完治することはない。蓄積させたはずのダメージも直つてはいるのか、涼しい顔でランドンは立つていた。

——呪いか？ 対象者は傷を完治させるがその者には呪いがおとずれるとか？

それならばあの果実の異常な回復力も目の前の瘴気も納得がいく。だがランドンには呪いに掛かったような様子はない。

「お前何喰つたんだ？ つて顔をしているなアドリスクよ」

「あ、ああそりだよ」

「まあそうだろうなこの果実は俺様のような位の高い魔物しか知らんからな」

さつき切つたはずの目を見開き、こん棒をなめまわしながらアドリスクに問う。

「そうか。でも、お前は戦闘において相手にも自分にも対等を求めるのだろう？　なら
教える」

「そう焦るな。最初からそのつもりだ俺様が喰つたのは

『進化の秘法』の果実だ

「……」

「人や動物、魔物などの生物を従来の成長の過程を無視して進化させる力を持つ……今
俺が喰つたのはその力を薄くして果実に混ぜたものだ」

「進化ね……」

「ゴラマス様が『進化の秘法』を持つ者から奪つてきたらしい。いずれはこの力で人間を
殲滅するのだ」

「あーもう分かつたからさつさと始めようぜ。お前倒して早くあいつら追いたいし」

——ただの回復の道具か。

進化……なんて大層なことを言っていたが要するに回復するための希少な道具なのだろう。

そう思つたアドリスクは再びランドンを倒すため剣を抜いた。
剣を右手に盾を左手に持ち、ランドンに向かっていく。

対するランドンは懲りずにこん棒を振り下ろす。

その所作はゆっくりでアドリスクにも十分かわせる……はずだつた。

「速い！」

かわそうと足を踏みしめた瞬間、急激に振り下ろす所作が加速した。避けきれないと
判断したアドリスクは急遽盾でのガードに切り替える。

「うぐつ」

ここに来て初めてアドリスクはまともな攻撃を受けたがその衝撃は計り知れないものだつた。

第Ⅰ章 10 過去を見つめて

二人の子供を乗せた馬は走っていた。一人は紫色の髪をなびかせて唇をかみ、金髪の子はしきりに後ろを振り返る。

二人合わせても重いなんて感じない。何も感じないまま長い地下洞窟をひたすらに走り続けた。

——このふたりを隣町まで頼む

まるで疲れなんてなかつた、むしろ気持ちいいぐらいだ。
黒髪のアドリスクの瞳に、ウエンディの姿が霞んだ。

ああ任せてくれ、と言わんばかりに走る。

だがカストコ自身の瞳は既に空虚だった。

「ど、どうしよう」

マルカは「先に行つてゐるわ……アドの奴絶対に吐かせてやる」と言つて、カストコから颯爽と飛びおりてアドリスクのもとに向かつた。

ラルスにはそんな真似はできないので、カストコを止めようと手綱を握つていたが、止まる気配はない。

嫌な予感がして、ラルスは身を乗り出して気づいた。

「……どこも見てない」

カストコは前を見ているのか上を見ているのかよくわからない虚ろな目をしていた。必死に呼びかけたがカストコの様子に変化はない。

「こうなつたら……」

ラルスは目を閉じて集中する。

未だ成功したことのないラリホーを使うつもりで、体から腕を通して指先に魔力を集中させる。

「お願ひ眠つて」

それから数分経つてもラリホーは出来なかつた。

「はあはあはあ」

額に現れた汗を腕で乱暴に拭く。

「結構離されちゃつたみたい」

後ろを見る。巨体のランドンも今では小さく見える。

ラリホーはできない。かといってこのスピードで飛び降りでもすれば、運が良ければ軽症、打ちどころが悪かつたら……ラルスは首を振る。

「いや、このままだつたらカストコは死ぬまで永遠に走り続けるかも知れない。絶対にラリホーを成功させないと」

一呼吸し、改めて指先に魔力を集中させる。

「我、ここに宣言する。彼に一時の安らぎを……つて！」

ラルスは一旦指を止め、目の前を見つめた後、もう一度集中した。

「……アドリスク、マルカ、カルド力を貸して。

我、ここに宣言する。彼に一時の安らぎを与える！」

するとカストコは崩れ落ちるように、座り込んだ。数センチ前には大きな岩石が立ちはだかっていた。

「こつちにも岩あつたのか……かなり用意周到だな」

抜けるべきだつた出口は岩石によつて、その口を塞いでいた。あと少し遅ければカストコは突つ込んで絶命していた。

「お疲れ様。あとは僕たちに任せ……」

ラルスは、カストコの体を撫でると杖を突いて立ちあがつた。

「嫌な予感がする。あれは今の僕たちにかなう相手じゃない……だから」

独り言ちて、彼は過去に軍隊アリが作つた穴に入つていつた。

15歳の時だつた。

性別の割には大柄でがつしりと肩幅も広いシスターが神妙そうな様子でラルスを呼

び出したのだ。

ソルクトルムの教会では、捨て子を預かっている。しかしその子供が教会に預けられた経緯は、神父かシスターの独断で知らされることになつていてる。

「えと、なんで今日なのでしようか？」

「もうすぐ十六でしょ。ラルスのことだからアドリスクについて一緒に魔物退治に行くんだろうけど——その前にあんた自身のことを知つておいても損はないと思つてね」

「分かりました。でもシスター、話を聞いてもあなたが僕の母親であることに違いはありませんからね」

シスターは少し頬を緩め、その後話し始めた。過去を逡巡するように。

「ラルスも知つているだろうけど、こここの子供たちは扉の前に手紙やらと一緒に赤ん坊の時に預けられていることがほとんど。でもあんたは小舟に乗つて川から流れてきたの」

「……川ですか？」

「ええ、あなたが六歳の頃に」

ラルスは首をかしげる。

「僕も皆と一緒に赤ん坊の時から……いたん……じゃないんですか？ 全く記憶にないのですが」

シスターは懐から茶色がかつた紙切れを取り出した。

「読むわ

『この子の名前はラルス。歳は六歳。訳あつて記憶が欠如しています。この子を守るため……いえ私たち大人の醜い争いに巻き込まれただけなのです。

お願いします。この子を拾ってくれた方、どうかこの子に普通の幸せを、与えてあげてください

いつまでも愛しています、私のかわいいぼうや』

読み終えるとシスターは、手紙を手渡した。

「あなたの過去に何があつたのかは知らない。でもあなたの母親はあなたを愛していたんだと思うわ」

「えへへ……ごめんシスター少し風に当たつてくるよ」

シスターの言葉に、真顔になつてラルスは教会の扉を開けた。行先は荒地とかしたサラス大森林だつた。

いつもアドリスクとレストランがカルドの指導のもと訓練している近くに腰かけた。

——訳あつて

——守るため

——醜い争い

——普通の幸せを

——愛しています

「でも捨てた」

空を見上げて、呟く。

アドリスクはカルドの素顔を暴こうと、あの手この手で鉄兜を外しにかかり、たまにマルカに暴言を吐いてみぞに拳を受けて気絶する。そんな彼の傷をホイミでラルスは治す。レストランはそんなアドリスクを見ては何やつてだと馬鹿にする。

——そんな日常を送つて十六になつたら四人で魔物退治に出掛け同じような日々を過ごすつもりだつたのに。

自分を捨てた人のことなどあまり考えなかつた。考えようともしなかつた。

「なんで、こんなに気になるんだろう」

ラルスは身を縮め両膝の間に顔をうずめる。

「おや珍しい顔だね何かあつたのかい？」

聞きなれた声に導かれ、ラルスは顔を上げるとそこには戦士の姿があつた。

第Ⅰ章 11 背けてきた現実

奥へ奥へ進んでいくと、道の幅にばらつきが見えた。体を縮めないと進めなかつたり、ドーム状に開けた場所があつたりと、地図でもなけば迷う。

しかし、今のラルスにはそんなことを考える余裕もなくただ前に進んでいく。

「……いたずらモグラー、おーい」

壁に手をついて、ふらふらになりながらもモグラ達を探すべく、必死に迷路のように入り組んだ道を歩く。呼びかけるも声だけが反響し、肝心のモグラ達からの反応はなかつた。

「アドリスク……」

アドリスクが一人頑張っていたのは知っていた、周りの期待を裏切るまいと懸命に鍛錬していたことも。そんな彼でもあのボストロールには勝てないかもしね。マル

力と二人でもその予想は変わらない。

だからこそラルスは、カストコを眠らせたままこの洞窟内で唯一協力してくれそうないたずらモグラ達を探していた。傷を負つたという彼らのボスを自分がホイミを使って回復させれば十分ランドンに対抗することができるだろう。

「だから早くモグラ達のねぐらを探さないと」

歩き回っているのだが気配どころか足音一つ聞こえてこない。入口から離れすぎたのか戦闘の音も聞こえてはこなかつた。

ただ焦燥感だけがある。

その一方でラルスの顔色は悪い。病人のように青白い顔をしていた。

さつきまでラリホーを成功させるべく何度も唱えていたこともあるが何より、一人になつたことで考え事が増えた。

ランドンは言った。賢者の使徒は自分が殺してきたと、時期的に考えれば恐らく三年前からになるだろう。その人たちの中には大勢知り合いがいた。いやラルスにとつては家族にも等しい存在も。

「海賊になつて大海原を駆けるのが夢だつたイワン。冒険者になつて着の身着のまま自由になりたいといつてサドラさん。いつかシスターのように自分も親がいない子供たちの面倒を見てあげたいといつてリーシア姉さん、それからマルコスさん……みんなみんな死んじやつた。」

目に熱いものが来るのを感じながら、ラルスは歩く。涙を流すのは全てが終わつてからだと自身の感情を押し殺し鼻水をすすつた。

「……いたつ」

足に何か大きなものがぶつかりラルスは思わずかしの杖を離して前に転んだ。口に入つた砂を口から出すと立ち上がりほこりをはらつた。幸い大きなけがをすることもなく前に進もうとしたが足元にあつたそれはとても無視できるものではなかつた。

「がい……こつ？」

どうやら自分は骸骨の頭を蹴り飛ばしたらしくと認識するまでにラルスは少し時間

を要した。

「そうか」

洞窟大討伐の末に死んだ兵士か、それとも賢者の使徒かそれは分からぬがラルスはそのがいこつに向かつて膝をつき、両手を合わせた。

「神よ、大いなる神よ。死してなおこのような状態で現世にいる者に安らぎを与えたまえ」

頭を下げ、祈る。その所作は洗練され、神父とも引けをとらない見事なものだつた。ラルスは深くうなだれると再び立ち上がつた。

「すいませんあとで必ず埋葬しますから」

死体は転んだ影響か、骨が散らばつていた。死体は教会が孤児院の役割をしていたこともあつて見慣れてはいたが骸骨は初めて見る。ラルスはあとで来た時にちゃんと埋

葬が行えるよう今のうちに骨を一つのところに集め始めた。

骨には損傷はなかつたのでもしかしたら、死因は餓死かもしないとラルスが思い始めたとき骨に包まれていて、紙を見つけた。

右手に包まれたそれは、誰かにあてた手紙のようだつた。
広げた瞬間ラルスはそれを落とした。

「そんな！　でも、……やつぱり……これって」

単体ではなんら意味のない単語を並べラルスは放心状態になる。そして本当にあの人があの娘にあてた手紙なのか恐る恐る最後の紙を開いてラルスはどうとう倒れてしまつた。

『前略マイナン様』

『あなたの兄マルコスより』

第Ⅰ章 12 決心

「こんな夜更けにどうしたのかな」

その戦士はいつも全身を鉄で固め、四人は彼が『カルド』ということしか知らない。しかもその名前さえ怪しいが、実力は本物である。

「悩み事……のようだね。話してくれないだろうか？」

「カルド……」

ラルスは顔を上げ、夜風に揺れている草花に目を向けながらぼつりぼつりと話し始めた。

「……どうかラルスにそんな過去があつたとは」

「うん。いきなりだつたからちよつとびつくりしちやつて」

「その内容ではな……君の母は今も生きているがあるいは……」

「僕は今まで孤児院の、教会のみんなが家族だと信じて疑わなかつたから。シスターと神父様との間にできた子供だと思つていたから。産みの親が別にいたなんて想像もしてなかつたから」

「記憶欠如のせいだろうな」

「みんな何かしら自分の親についての記憶があるからね。僕にそれがないのはシスターの子供だからだと思つてた……」

「ラルスはその産みの親についてどう思つているのだ？」

そう問われてラルスは考えた。

自分は本当は孤児であること。実の親がいること。その親は自分を助けるために記憶まで操つたこと。

普通——ではないが幸せなら今ここにある。愛情も、もらつていて。自分の母親が想つてくれていてということは知つていて。でなければ自分は今こうやって幸せを再確認することもなかつただろう。

「分かりません……ただ一度会つてみたいという気持ちがあります」

「……ふむ」

「シスターが今日あの手紙を見てくれたのはきっと、僕と母親を会わせたいと望んだからだとおもいます。」

「僕はそれに応えたい」

鉄兜に向けて話す。その瞳は情熱的に輝いていた。決意に満ちた言葉を受けるとカルドは初めて鉄のグローブを脱ぎ、ラルスの金色の髪を撫でた。ラルスは目を丸くしていたが、やがてその手のひらに体を委ねた。

「いい答えたラルス。私が出る幕もなかつたようだな」

「いえ、誰かに聞いてもらつて自分の気持ちに整理がつきました。カルドありがとうございます」

「やれやれ、やつとさん付けから解放されたと思つたらまだ敬語の方が残つていたな。私と君たちは友人なのだから対等に接してくれといつも言つているだろう」

軟らかい響きをもつて話したカルドはラルスにデコピンをくらわせた。それから鉄のグローブをはめなおし、懷の木刀を取り出した。

「ラルス。君はサウスラッド王国を知っているかな」

突然出た名前に少し戸惑つたがやがて神妙な顔つきになつた。

「勇者ヘクトル様の出身でしたよね。確か王子だつたはず」

「ああ、今は国を治める王になつてゐる」

「それがどうかしたんですか？」

カルドは騎士のように木刀を胸の前にあてた。

「ごく一部の人間しか知らないのだが……今から数年前サウスラッドには二人の王子がいたそうだ。第一王子と第二王子。本来なら第一王子が王の座につくはずだつたのだがその王子は頭が悪く要領も悪いよほど王には向かない人材だつた。一方第二王子は小さい頃から才能にあふれ将来を期待された男だつた」

「そんな話が……その第二王子が今のヒューゴ様だと」

「いや、ヒューゴは第一王子の方だ」

「え？　じゃその第二王子は今どこに」

カルドは月を見上げた。

「行方不明……だそうだ。伝統を重んじ第一王子を王とするもの。国をもつとよくするためには優秀な指導者が不可欠だと主張し第二王子を王とするもの。当然意見が別れ、目に見えない争いの末『第二王子行方不明』という形でそれは終わつた」

なぜ今こんな話をするのか、その意図がようやくわかつた。

「その第二王子が僕じゃないかとカルドは思つているの？」

「いや、あくまでそういう話があるということさ。確証は一切ない」

「……だよね。僕ホイミしか使えないし第二王子のように才能があるはずないもんね」

「そんなことはない。君がそう思つているのならそれは勘違いだ。才能なんてものは存在しない。それは途中であきらめてしまつたものの台詞だ。君がそれを口にするにはまだ早い」

「……カルド」

「ラルス、君には期待している当然レストランもマルカにもアドレスクにも。でもいつか

私がいなくなつた時、三人を支えるのは君だつたらいいと思う。後數十日後には私は國に帰る。本当なら直前に教えようと思つたのだが今君に伝授しよう」

カルドが拳を広げるとそこには緑色の玉が出現していた。それを遠くの地面に向けるとすーと飛んでいき、やがて地面上に着弾すると一帯に激しい風が舞つた。

「こ、これは」

「初級呪文バギだ」

地面の草花が根こそぎ宙に舞う光景を見て驚愕した。バギを初めて見たこともあるが、なによりカルドが魔法を使うところは今までなかつたからだ。

「あなたは、いや君は一体……」

「フツ、正体が知りたければアドリスクと一緒に私の兜をはずしにきたまえ」

カルドと出会つてからのアドリスクとレストンは彼の正体を知るため毎日のように模擬戦を行つていた。勝利条件はただ一つ、カルドに一撃加えること。簡単そうに見え

るが一撃加えることはおろかいつも開始前と終わつた後の立ち位置を変えることさえできずにいた。

マル力を加えた三人で挑んでもそれは変わらなかつた。それほどまでに剣の腕前を持つ男がおまけに呪文さえ操ることをすればアドリスク達が戦意を失うかもしないとラルスは思つた。

「ただ、この呪文に限らず初級呪文というのは中級呪文や上級呪文より難しい。初級とはいえ呪文の根幹をなすもの、出発前に君が覚えられるかどうかわからん。そもそも呪文は指南するものではなく体で覚えるものだから戦闘において初めて使うのがいい……だがここで教えておくとしよう」

「どうして今なの？」

「君には自信を持つてもらいたい、というのもあるが……まあ個人的なことだからあまり気にするな」

「分かった僕頑張るよ」

返答を受け取ると木刀を収め、指を一本立てた。

「それからもう一つ、これは君にだけ教えておこう。アドリスクは本来剣を持つべきではないのだ」

ラルスはめのまえが真っ白になつた。アドリスクの悩みを、彼が魔法が使えないその想いを一番知つてゐるはずの彼が何故そんなことをいうのか意味が分からなかつた。追及する声にも思わず怒気が混じる。

「アドリスクが剣を持つ理由をカルドだつて知つてるんでしょ！ あんな魔法を放つてさすがは英雄の孫だなんていわれたのに！ それ以来魔法が使えないからああやつて別の形でみんなの期待に応えようとしているのに」

「すまない言葉足らざだつたな。そうではない。私が言いたいのは彼に剣は向いていいといふことだ」

「それって、別の……例えば槍とか弓にしろつてこと？」

「違う、彼は、彼の身体はそもそも肉弾戦には向いていない。彼は根つからの魔法使いなのだ。いくら修行しても限界はすぐに訪れる」

「そうだつたのですね」

「ああ、だからもし私がいなくなつたらそのことを頭の片隅に置いてくれないか？」

「分かりました」
「もうすぐ日が昇る。修行は明日の夜からにしよう時間が余つたらそعدだなラリホーで
も教えるとするか」

その数日後カルドは四人の前から姿を消した。

第Ⅰ章 13 救世主

『いいかアドリスクこのペンダントはずつとつけているんだよ片時も外さぬようにな』

『外したらどうなるの?』

『お前の周りにいるものが傷ついてしまう。そしてお前自身も……だがな』

アドリスクは極大氷結呪文マヒヤデドスを唱え魔物を掃討した。後始末として、ソルクトルム! ウエンディは三日かけてサラス大森林にすべての呪文の基礎と言われるメラを中心とした火炎呪文を唱え続け氷を溶かした。

それから一週間寝込んでいたアドリスクの元ヘウエンディが、盾の形をした赤い宝玉を持つてきたのだ。

『お前がもし、勇者に会うことがあればそれを外して会いなさい』

『勇者つて、ヘクトル様のこと?』

『いや、あやつではない。とにかく勇者に会うまでは絶対に外すでないぞ』

『うん分かつた!』

『よしいいこじや』

ウエンディは孫の頭をなでると扉に手をかけた。

『おじいちゃんどこ行くの?』

『わしは、旅に出る。お前のためにのう』

『僕のため?』

『そうじゃ。お前が……』

——なんて言ってたつけな? 忘れちまつた。

——なんか眠いな

眼を少しだけ開くとマルカがランドン相手に立ちまわっているのが見えた。彼女は攻撃を避けつつも何かを叫んでいた。

——ああ俺を呼んでいるのか

頭から血が出ているようでうまく頭が回らない。壁に寄りかかる形で座っている。たつた一撃で盾は壊され、衝撃で吹き飛ばされたのだ。マルカが食らえば確実に絶命する。

「逃げろ。逃げてくれ……マルカ」

声はか細く誰にも聞こえない。しかしその代わり妙な音が聞こえてきた。ひどく耳障りで不快な音が。

「もう大丈夫」

耳元で囁かれると同時に耳栓がつけられた。それから体が回復していくのがわかる。「ラルス！」

ラルスも耳栓をしており声は届かなかつたが、ラルスは首肯した。そしてアドリスクはランドンの方へと視線を移す。

そこには黒髪をちよんまげに結つて、ギャングを思わせる丸眼鏡をしているどでかいモグラが歌つていた。

「ワシの芸術スペシャルをとくと聞くがよい！」

「くおつ、この下手くそな歌は……」

ランドンは耳を塞ぎ苦しそうに身を縮こませる。

「ドン・モグーラ貴様ついに裏切つたな！」

「ふつ、これまでワシの部下が世話になつた……だがそれも今日までモグ」

ドン・モグーラはさらに声高らかに歌い、ランドンを苦しめた。

「妙な果実でパワーアップしたとはいえ聴覚までは強化できなかつたか」

アドリスクは剣を手に立ち上がる。身体は既に全快しており、耳栓を着けていたため、自由に動き回れた。

「これならランドンを倒せる」

またしてもその言葉は誰にも聞こえない。しかしそれはアドリスク自身を勇気づけた。

第Ⅰ章 14 真意

「ああ、どうすればいいんだろう」

「落ち着け、落ち着けここは一旦冷静にだな」

「生きてる……よね？」

——なんだろう。すぐ近くで誰かが喋っている

ラルスが体を起こすと、そこには大勢のいたずらモグラがいた。かつて住んでいた教会ほどの大きさのその洞穴は多くの道具があった。雑貨はもちろんスコップは大量に、そしてなぜか楽器が多く見受けられた。

「目が覚めた！」

「早速ボスに知らせないと！」

「まずは元気かどうか聞かないと」

けだるそうに起きたラルスにモグラ達は慌てふためく。

「あれ、どうして僕はここに？」

「倒れていたんで運んできたモグ」

疑問を口にすると、入口で出会ったキラーピッケルがそれに答えた。

確か自分は歩いていたはずだ、歩いてそして骸骨に躡いてそれで……。

手元に視線を落とす。そこにはくしやくしやになつても持つていた手紙が一通。

魔力消費の疲れもあつたのだろう。しかし決め手になつたのは知人の遺書を見てしまつたせいだとラルスは思つた。

実際なぜこんなことになつてしまつたのか。ランドンは言つていた王様は僕たちを生贊していると、それで国を守つていると。王様は許せないが、しかしなぜアドリスクだけを遅らせたのかそれが引っかかる。もしかして王様はランドンが倒されるかもしれないとそのことを危惧したのかもしれない。

ここでランドンを倒した場合、信じられないが多分国は滅びる。王様が脅されているのだ、それだけでも現実味を帶びていた。

国が滅びるということは大勢のひとが死ぬ。マイナンもシスターも、王様は当然なが

ら。だとすれば、この頃彼……クルリドの姿が見えなかつたのは。

「偶然……なんだろうか」

そもそも王は今日の昼間など言つていた?

確かあの時王は……

旅立つ直前、王の言葉に『賢者の使徒』は絶句した。昨日のパーティーで見かけることはなかつたものの、絶対に彼ら二人は来ると思つていたからだ。

「さつきも言つた通り、賢者の孫ルルムソクトニアドリスクは体調を崩し今からの出発は間に合わん。それからレストランは一週間前から行方が知れん」

再三の言葉に不安が走る。

今期はレストランとアドリスクがいるのだ。もちろん基礎訓練は済ませたものの、眞面目にするものはあまりいなかつた。

魔王が倒れた今現在、『賢者の使徒』は一種の度胸試しのようなものになつてゐる。もちろん、アドリスクのように魔物退治に勤しむものや商人の町キアラでウガタン老師に教えを乞うものもいるが大半は隣町ラスペスタに行つて帰るというピクニツクにでもいくような気分でこの場にいた。

「しかし案ずることはない。心配せずとも夕方には治つておる。賢者の孫は目覚めしたい、すぐに君たちに追いつくから安心して向かうがよい」

その言葉を聞いて皆大いに歎声を上げた。『夕方には治る』。そう断言した王の言葉に疑問を持つものはいなかつた。マルカとラ尔斯を除いては。

「ちよつとなにあれ」

「……僕には全然分からぬ」

王の言葉を聞いて二人は啞然とした。

本来『賢者の使徒』は自由参加だ。例え王であろうとも強制はできないはず……それが二人の共通認識だった。

今日二人がこの場にいたのは、自分たちが不参加であること、とくにアドリスクの不在は言つておかなければまずいと思つたからだ。

「納得いかないわ。早く王様に取り消してもらうよう頼まないと」

「ま、まつてよマルカ」

ラルスの制止もむなしく单身マルカは人込みをかき分け王のもとに向かつた。警護兵に重い一発をお見舞いしながら向かうとすぐさま取り押さえられた。

「は、はなせ私は王様に用があるんだ」

「貴様のような人間を王に近づけるものか」

ラルスが遅れて着くと、数人の兵士に押さえつけられているマルカの姿があった。ラルスがやめさせようと近寄る前に声が聞こえてきた。

「これこれ、大切な『賢者の使徒』に対して無礼であろう」

「しかし王様……」

マルカを抑えつけていた兵士はおどおどしながら王様に答えた。王様の登場で力が緩んだのかマルカがすぐさま抜け出した。

「ソルクトルム王。無礼を承知の上ですが、とてもアドが……賢者の孫が今日中に出発できるとは思えません」「治つておるから心配せずともよい」

「僕たち、さつき会いましたけれどとも今日中には……」

「なんじやお前たちワシが嘘をついているとでも申すつもりか?」

「いえそんなことは……」

王様はアドリスクが病に侵されていることを知っている。それについては別に問題視してはいない。それぐらいは把握していても不思議ではない。
しかしながらなぜこうも断言できるのか、まるでいつ治るか知っているみたいじやないか。

「ええい不快じやな、おいこいつらをつまみだせ！」

マルカの真つすぐな視線に憤慨したのか、数分前とは別人のような口調で兵士に命令した。

「はは！ 直ちに」

それから二人は乱暴に城の外に放り出された。

「あんたたちの顔覚えたからね」

兵士たちに恨めがましい目を送ると、兵士はいそいそと退散した。

「ちょっとおかしいよね？」

「ちょっとどころじゃないわよ。狂つてるわ」

マルカは少し疲れた様子で髪をかきあげると、ラルスに向き直った。

「とにかく行くしかないみたいね……とりあえず私が起こしに行くからラルスは協会の

方で待つてて」

「うん。分かった」

そこで二人は別れた。

確かあの時もクルリドはいなかつた。

第Ⅰ章 15 協力

「お目覚めモグか？」

クルリードについて思考を巡らせていると、白い手袋に黒髪のちよんまげ、その体躯にはやや小さい丸メガネをかけた、モグラが立っていた。しかし怪我をしているようで、包帯や切り傷が生々しく彼の体を蝕んでいる。その表情もなんだか苦しそうだ。

「ボス？ ですか？」

他のモグラとは、明らかに違うモグラにラルスは思わず尋ねた。

「そうだモグ。このアジトのボス、ドン・モグーラだモグ。うちのもんが世話になつたモグ」

「いえ、僕は何も……それよりドン・モグーラさん。ランドンを倒すために手を貸してください。お願ひします」

ラルスは頭を下げる。

彼がすぐに合流しなかつたのはこのためだつた。戻つたところでランドンを倒せるとは思えない。ならばといたずらモグラ達が言つていた「ボス」に協力を仰ぐことでランドンを倒すことが出来るかもしねれない。

これはラルスにとつてかけに近かつた。魔物と人間は基本的に相容れない。たまに人間の言葉を話すこともあるがそれは別に心を許した訳では無い。同情を誘つたり、脅したりと使い方は色々ある。

「当然だモグつ。おいお前ら早く準備を続けるモグ」

「はい。ボス！」

聞くとすぐにモグラ達は動き始めた。散らばつていた道具やスコップは準備のためのようだつた。

「いいんですか？」

「いいモグ。前々からあいつの事は気に入らなかつたモグつ。それに監視させている部

下によれば剣士は一人で善戦しているようだモグ」

「剣士……！」

「人間。お前の名前はなんだモグ？」

「ラルスです」

「ラルスか。覚えたモグ。ワシたちは10分後攻撃を仕掛けるモグが……どうするモグか？」

出来ればすぐにでも向かいたかつたが……という思いを抑えラルスは答える。

「あなたの傷を治して一緒に行きます」

「たしかにそれはありがたいモグが……大丈夫モグか？」

「はい。少しですが眠れたようなので」

ラルスがドン・モグーラのそばに近寄るとその指先から暖かな光が生じた。

「回復魔法は心地いいモグ」

「……この傷はランドンに？」

「いや、違う。人間に1週間ほど前にやられたモグ」「人間……？」

1週間ほど前と言えばちょうどレストランがいなくなつた時期である。あの鉄の騎士カルドに「見事」と言わせたほどの腕前を持つ。

「その人間は1人でしたか？」

「2人だつたモグよ、でも実際に闘つたのは1人だつたモグ」

その言葉にラルスの直近まで持つていた思考とリンクする。

——クルリドとレストランは一緒にいる？

可能性は高い。クルリドを逃がすため、レストランを用心棒に王様は任命した。なるほどそれならば色々と説明がつく。

「もう終わりモグか？」
「え？ ああすいません」

見れば光は消えていた。慌ててもう一度ホイミをかける。気になるが、今はアドリス
クとマルカのことを考えるべきだつた。

改めて魔法を練りなおそとそこでふと違和感に気づく。

「……あれ？ この者に癒しよ、ホイミ！ ……ホイミ、ホイミ……」

幾度も念じたが、声が響くばかり。代わりに液体が落ちる音がした。

反射的に見上げるがただの天井、しかしまだぼとぼと音がする。嫌な予感がして手
で鼻のあたりに触れる。

「こんな時に！ ……僕は」

ラルスの予感は的中していた。

『魔力欠乏症』

初期症状として、鼻や目から血が出てくる。それでも無理に魔法を使えば、最悪の場
合死に至る。魔法を扱う者にとつては切つても切れない病である。
少し休んだとはい、まだ万全の体調ではなかつたのだ。

「……でも」

迷うことなくラルスは治療を続行した。再び柔らかな光がドン・モグーラを包み込む。

「お前、死ぬつもりモグか？」

ドン・モグーラは尋ねた。これまで会つた人間達は、洞窟を歩いていた部下に問答無用で戦闘に持ち込んだ。その事は恨んではいない。人間と魔物は敵対関係にある。それは一種の共通認識であつた。

この人間はどうだ。閉じ込めようとした部下に回復魔法をかけ、そしてそのボスである自分に協力を仰いでいる。仲間を助けるためなのだろうが、目の前にいる人間の性根はもつと崇高なものであると、ドン・モグーラは感じた。

「僕にはやることがある。でも別にそのためだけにここにいるわけじゃない。2人は僕の大切な仲間だ」

その言葉にドン・モグーラは納得したようになぶりを振ると、ガラクタの近くにいたいたずらモグラに指示を出した。

「ワシのお宝コレクションその8を持ってくるモグ！」

「しかしボス。あれは相当値打ちの高い……」

「いいんだモグ」

ボスの口元に笑みがこぼれる。その様子を見て1つ敬礼するとガラクタの中から紫の液体の入ったティー・ポットを手に戻ってきた。

「ささつ、これを飲んでくだせえ」

「これは？」

「エルフの飲み薬さ！」

エルフだけが作れる薬で、その有用性とあまり出回らないことからその希少価値は城が1つ建つと言われている。飲んだものはたちまち魔力が回復し、三日三晩魔力切れ知

らずになるとても貴重なものである。

受け取れない。そう思つてドン・モグーラを見れば、ラルスに親指をすつと上げた。その仕草は、あまり人間のそれとは変わらなかつた。

「じゃあ、ありがたくもらつておくよ」

鼻血は止まり、血液が全身に行き渡るようなそんな感覚になる。

「よしつ。あとちよつとだ」

一気に飲み干し、全力で治療に当たる。

「待つてて、アド、マルカ。僕が行くまでどうか……」

部下が反抗したため、後に引けなくなつた。しかし今は彼らの力になりたいとドン・モグーラは強く願つた。

第Ⅰ章 16 その音は

「グオオツー——。頭が、頭が割れるように痛い！」

「こんなにいい気分で歌うのは初めてモグツ。いつもは人間たちがいない時にそれにこつそりと歌つていたモグよ」

ドン・モグーラは気持ちよさそうに歌い上げる。しかしその表情とは裏腹に、口から出る音は、ガラスを引っ搔いたような音も、生き物の断末魔さえも子守歌と思えるようなひどいものだった。開けた場所であるのならばともかく音がこもる洞窟ではそれがよく響く。

耳栓を着けていないのは、本人とランドンぐらいのもので、苦しんでいるのはランドンだけだった。

こん棒を落とし両耳を手で塞ぐ。それでもなおその顔は悲痛を訴えていた。

アドリスクとマルカはその隙を突き、ランドンの膝頭めがけて剣を、その裏側に拳を突き出した。

「さすがマルカ、俺のやることが手に取るように分かるらしい」

まるで考えが共有しているようにほぼ同時の攻撃だつた。ランドンはダメージが溜まつていたようですが膝を着いた。

それからアドリスクがマルカの方を見れば、紫色の髪を垂らしその隙間から眼光を輝かせていた。そのままフラフラと歩き近づいてくる。

「……えっと、マルカさん？」

「後で、100発だから」

マルカは耳元で囁く。ほとんど無音のはずなのになぜか聞こえてきた。

——怖い。怖すぎる。ちょっとしたホラーだろこれ

思い当たる節はある。おとりとなつて二人を逃がしたこと。それに対して怒つているのだろう。

——ラルスに頼もう

彼になだめもらえばマルカの機嫌も幾分かマシになる。殴られるのは確定しているが、数が減ればそれでいいとアドリスクが自分の身の振り方について考えていると、

ぞろぞろとモグラが出てきた。

「行くぞ——」

キラーピッケルがピッケルを掲げその後にモグラ達がスコップを持つて文字通り袋叩きにする。

「この野郎くらえ！」

「必殺のスコップトルネード！」

「えいやそいや」

水を得た魚のように叩きのめす。その間ラルスは、二人に補助呪文スカラをかける準備に入っていた。

「こしゃくな……貴様さえいなければこんなはずでは」

恨めがましい様子でランドンは睨みつける。対してそんな地に伏したランドンを勝

ち誇ったようにドン・モグーラは見る。

「モグモグモグ。ワシの歌に感動で声も出せんか?」「くそつたれが!」

ランドンはこん棒を手にドン・モグーラに襲い掛かる。

「お前のノロい攻撃なんてすぐにかわせるモグ」

「それはどうかな」

瞬間、振り回す速さが増した。そして初めて気づく。ランドンの瞳が赤く染まっていることに。

「なつ」

その意味を考える暇もなくドン・モグーラの体は壁に叩きつけられた。

「……どうしたラルス？」

一瞬驚き手を降ろす。悔しそうに泣きそうな顔でラルスは下唇を噛んだ。
ただならぬ雰囲気に二人が振り返ると、ぐつたりしているドン・モグーラ、こん棒の犠牲になつてゐるモグラ達の姿があつた。

「げははは、貴様さえ倒せばもうこっちのものだ！」

高らかに下品に笑う。50はいたモグラ達は為すすべもなく吹き飛んでいた。
もはや立つてゐるのはランドンと……

「もう一回聞くけどよ、逃げる気はないか?」

栓を外しながら二人に問う。

「もちろんないよ」

「寝ぼけたこと言うわね。先に殴られたい?」

「……めん。そして頼む。二人とも死ぬなよ」

返事はなかつたが、二人は無言で首肯した。

後で少し外伝を挟みます。

第Ⅰ章 17 絶望の果てに

「さて」

ランドンは目の前に横たわるモグラ達を見て冷静になつていた。三年前から人間どもを洞窟で待ち伏せ、力の限りこん棒を振るい死に至らしめる。魔王ロクタスが勇者へクトルに倒されて以来ランドンにとつてこんなに気持ちのよい仕事はなかつた。

ランドンはボストロール族の中でも頭脳派として通つていた。冷静沈着が彼の売りだつたからだ。

しかし彼はこの時初めて人間に對し、興奮していた。「何かあつた時に使え」ゴラマスに言われ渡された進化の秘宝を用いたこともある。おかげで傷はすぐに癒え能力が上がっていくのが肌で感じられた。だが大きな要因は別にあつた。

「補助呪文——スカラか」

およそ十メートルほど離れた場所で、ロープをまとつた青年が武闘家の少女と剣を

持ったアドリスクに呪文をかけているのが目に入った。二人はこちらを見据え、呪文がかけ終わればすぐにでも向かってきそうな表情をしていた。

「おつと、もう切れていたか」

腰巻をまさぐり静寂の玉を取り出す。直径十センチほどのその玉はほんのりと、真紅に輝いて不気味だ。静寂の玉の効力はおよそ一時間。ランドンはにやりと笑う。

左膝は蓄積されたダメージで立つのは難しい、たかが十七年生きた人間相手に一時間経過している。ここまで手こずるとは今の今まで思わなかつた。

ランドンはこん棒を左手に持ち替え、立ち上がる。

彼らを強敵と認めたランドンは静寂の玉を天に掲げた。

再び辺りを闇の光が包み込んだ。

その様子にローブの青年は困惑の色を浮かべた。それは突如発生した不思議な光よりも魔法が使えないという状況に対してのものだつた。

「仕方ない。行くぞマルカ」

一足先にアドリスクが駆けだし、それを追う形で少女が走り出した。途中まではいえいくらか耐久力は上がつていたようだつた。

「予想通りだな。そして……」

こん棒を持つ手に力を入れ、右足に重心を傾けた。

足を動かせない以上近接に持ち込まれたら勝機は薄い。そう考えていたランדוןは次の瞬間、こん棒をアドリスク目掛けて投擲した。

最初出会つた時とは違い、至近距離で大幅に能力は上昇している。しかも彼らはほぼ一直線に並んでいた。

先行していたアドリスクがはガードする暇もなく、棘が腹を貫きそのまま壁に叩きつけられ、少女の肩には持ち手の部分がが当たり軽快な音を立ててアドリスクとは反対側の壁際に転がつていった。青年はとっさに避けたが少しかすめ同じように地面を転がつた。

心地良い呻き声がランדוןの耳を刺激する。

「この声ほどいいものはないつ……そうだろう？」

「つモグ」

ドン・モグーラの腹を殴りつけ、その痛みに苦しむ様を楽しんだ後、下卑た笑みを浮かべた。

自分の血が辺りを染めていた。もう自分は助からない。そんな予感だけがある。

——何故呪文が使えないのだろう。何故あの時のことを覚えていないのだろう……
十一年前のある日以降ずっと繰り返してきた自問自答。最初から魔法が使えていた
ら……たった二人の友も守れない。魔法を使ったのはあれが最初で最後。無我夢中

だつたのかそれともマルカを助けるために必死だつたのか、あの一件で才能のすべてを使い切つたのかもしれない。

邪魔だと思いつつ祖父の言いつけ通り着けていたペンドントは粉々になつていいる。外せば災いをもたらすといわれていたが今となつてはどうでもいい。外し、半眼でランドンを見つめる。それに対しランドンは笑うと壁伝いに歩き始めた。

「俺に、俺にもつと力があれば……」

自分の無力さが悔しい。口端から血が流れる。

このまま死ぬのが先かランドンになぶり殺しにされるのか。だがそのまま目で追つていたランドンは自分ではなくマルカの傍に寄つた。

「な、なにを」

左腕で静かに持ち上げる。腕はぶらんと垂れ下がり白目を向いている。生きているのか死んでいるのかわからない。

「賢者の孫アドリスクよ貴様は最後にしてやる」「ふざけるな！　はあはあ……」

マルカはピクリとも動かない。

ラルスを見れば、うつぶせで必死に這いつくばつて二人の元へ来ようとしていた。
——せめて一太刀でも

死を待つのはやはり性に合わない。持っていた剣に最後の力を込める。そして産まれたての仔馬のように不安定な姿勢で立ち上がった。

「ここまで手こずった人間はお前たちが最初で……最後だ！ そのことを地獄で光榮に思うがいい！」

マルカの身体をぶん投げる。そこにはまだ大きな岩が入口を塞いでいた。

「やめ」

入口で砂煙が舞う。見てはいなかつたが、アドリスクは途中で息を引き取つたらしい。声が途切れた。

「まあいい。お前を殺した後はその死体をこん棒で殴りつけてやる」

下唇を噛み、涙を流す青年に向けてランドンは言つた。そして笑いながらアドリスクを見てやつた。

「ガツハツハ。アドリスクよ、残念だぞお前とは最後まで……」

振り返るとアドリスクの死体はなかつた。血の池だけがそこにある。あの出血で動けるとは思えない。

「なんだと一体どこに消えた！」

「消えた？　消えてはいないぞ」

声の主はアドリスク。しかしそれは予想外の場所からだつた。

「ふむ、十年ほど経つてゐるのか。身体の方は随分育つてゐるようだな」

ランドンは目をこする。まるで今起きていることが信じられないといった様子で。アドリスクがマルカを横向きに抱きかかえていた。しかも腹の傷もすっかり元通りだ。

「ばかな」

何故そこにあるのか。何故傷が癒えているのか。二つの意味が集約した言葉だった。

「さて、記憶を辿る限り。お前を倒せばすぐにでもゴラマスが城の方へやつてきそうだな」

「何を」

「となれば……ふむ大体方針は決まつた」

「何を言つてゐる！」

少し怯えた様子でランドンは尋ねた。

「何を言つてゐるか——そんなことを君が考えられる必要はない。君は黙つて《吾輩》の手のひらで踊るだけなのだからね」

アドリスクは、いやその男は妖艶に笑つた。